
君は私のコレクション!?

佐川波瑠文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は私のコレクション！？

【Nコード】

N5034S

【作者名】

佐川波瑠文

【あらすじ】

藤本雪乃、大学2年生。雨の中走っていると、水溜まりに吸い込まれてしまった。溺れる私を引き揚げたのは、ちょっと変な！？色気ある美形男子。しかも、体が小さくなっちゃてるし！！そして、異世界トリップと幼児化の二重苦に悩む私に彼は言う。「君は私のコレクションです。」と。とある美術品収集家の彼のコレクションになってしまい、三重苦！？そんなご主人様の彼と収集物的私のほのぼの？ドキドキ？な日常。※6/24よりジャンルを恋愛↓ファンタジーに変更しました。

第1話 捕獲される

「お先に失礼しまーす。」

「雪乃ちゃんお疲れさまー！夜は、雨らしいから急いでなあ！」

「はーい。ありがとうございます。」

6月も後半。時刻は23時過ぎ。夕方から入っていたバイト先の某出版社を出る。

私、藤本雪乃。大学2年生となり、サークルで紹介してもらったバイトももう少して1年。

関東のはずれからこっちに出てきての一人暮らしは、初めは慣れなかった。けど今は、友達もいるし、料理も上達したし、勉強、バイト…忙しいけど、充実している。

今日も電話対応上手くなったねって褒められたし♪

そんなことを考えていると、電車は早くも最寄り駅に到着した。

ザー…。

「げっ！」

さっき、宮下さんが言ってたように雨が降っていた。

最悪ー傘ないよお！地下鉄だから気づかなかったあ！もういい。家まで走ろう。

私は、バックを雨から守るように抱き締めて走り出した。

この時間にしては、珍しく人がいないので走りやすい。

路面はもう濡れていて、夜だからいつも以上に真っ黒だ。

バシヤッ

「うわっ！冷たい！」

そんな路面なので、走るたびに見えない水溜まりにいちいち足を入れてしまう。

雨の日特有の空気と暗闇の中を走っているときだ。

今までは、リズムよく水溜まりに足を入れていたのに…。

ズプリ…。

「えっ!?!」

足が水溜まりに…はまって

「きゃああああ!?!」

叫び声とともに、私は水溜まりに吸い込まれていった。

「…やああああ!?!」

ドッポーン!?!

「ゴボッ!?!」

くっ 苦しい！ なんで？ なんで、水の中にいるの！？ あの水溜まりの中に落ちたの？

しかも、この水溜まり：足が着かない！ 溺れる、死んじゃう！

突然のことで頭が混乱して働かない。目を開けても辺りは、真っ白だし。いきなり水の中に投げ出されて、肺に空気もない。

そんな状況をなんとかしようと、水中でもがけばもがくほど、それが命取りになっていることも気づかず、苦しくなるばかり。はりついた服もそれを助長する。

なんか温かくなってきた：私このままもう…。

意識が朦朧としてきたその時だ。

ザバアッ

「うっ！ くうっ！！ ケホッ ケホッ！」

いきなり、水中から引き揚げられた。

目の前に飛び込んできたのは、水も滴る…滴っている美形の外人さん。

あごより長めの波打つ金髪に、透き通るような紫の瞳。そして白い水面の上から、引き締まった筋肉質な上半身が見える。

その外人さんの色気にクラクラしてしま…

「ニ、ニホンニンギョウ!!!」

「…?」

今、ニホンニンギョウ…日本人形とか流暢に言ったよね?

ザバリッ!

その外人さんは、いきなり水の中から立ち上がった。

「ひゃあっ!」

みっ見える! 嫌あ! アソコ見えちゃうから!!

思わず両方の手で顔を覆う。

その外人さんは、私の両脇にそれぞれの手を差し込んだまま、ザブザブと水の中を歩き出しているようだ。

あれ？

手がおかしい…なんか小さい？

顔を覆っていた手を外すと…

明らかに、子どもサイズだ！

「えっまさか!？」

私の上半身は、胸はペタンコで、お腹はポツコリしていた。

下は外人さんのせいで見れないけど、着ていたサマーニットはぶかぶかで、裾からは少しだけ足が飛び出しているようだ。

「うそ…。」

白い水の中にプカプカと浮かぶ、ブラとショーツとスカートを目に
したのを最後に、私は気を失った。

私、子どもになっちゃったの？

頭…働かせたくない…。

第2話 鑑定される

そよそよと心地のよい風が吹く。

「んゝんん。」

目を開けると、うちわを片手に、紺色の着流し？のような、でも柄や素材なんかはそれとは違うものを着た男の外人さんがいた。耳には紫色のきれいなピアスに首元には大小の赤い宝石が中心にされたネックレスを身に着けていた。

「気がつきましたか？」

あれ：私どうしてこんなところに？寝起きでまだ働かない頭で、ぼんやりと考えた。

さっきどこかで見た、金髪で紫の瞳の美形な外人さんかも。着流しがよく似合っている。

今は少し濡れた長めの前髪をラフに後ろに流していて、眼鏡を掛けていてる。どこか知的な感じがするんだけど、その色気のある感じには変わりない。

「さっ、私によく顔を見せて？」

彼がにこやかな顔をしながら、甘い声で頭上から命じる。その甘い声に誘われ、私は彼の瞳にたどり着く。

綺麗な紫の瞳。

水分を含み、キラキラとした瞳は水面のよう。中心は色濃いが、それでも底がどこかわからないほどの透明な瞳。私はその水の中の底を探すように、瞳の中をじーと見つめた。

彼は、すぐにさっきとは違う真剣な表情へ変える。

その顔にドキンとしてしまった。

「やはり、寝ている時と起きている時とでは印象が違いますね。」

彼は私の顎に手を掛け、角度を変えながら顔を見ている。

いや見ているというより：何かを呟きながら落ちついた声で言う様子も相まって、じつくりと観察か検分をされている感じがした。

私は彼の瞳を見つめながら、彼の一つ一つの行動にドキドキしていた。

ドキドキするたびに、体温が上昇していく。

そんな彼に私はされるがままだった。

「漆黒の綺麗な瞳。本物…。やはり想像以上ですね…。申し分ない。」

あなたの方が綺麗なのにつて思った。彼の美しい瞳の魔力に魅入られている：囚われている私はそう思った。

彼の右手が頬をなぞり、そのまま私の唇を親指でなぞった。

「しつとりと滑らかな肌。頬はほんのり染まり桃のよう。唇は桜色。」

甘い声はそのままに、落ち着いてた声は、何か逸る気持ちを抑えているように感じた。

ポタリ

「冷たい…。」

その時、彼の前髪が少し崩れ、その毛先から水が滴る。

それが私の顔にかかり、水滴が弾ける。

弾けた水滴は、私を彼の瞳の魔力から私を解放する。

彼への熱が冷やされる。

「なんと愛らしい声！君の父と母は素晴らしい仕事をされた。生んでくれてありがとう！この子は、実に素晴らしい！！！」

彼は、突然興奮しながら叫んだ。

カバリ。

「ぶぎゃっ。」

体を起こされたかと思うと、抱き締められた。

体が押し潰されて苦しくて、変な声が出てしまった。

てか、何か変なこと言ってなかった？

「あのっっ！離してください！」

苦しいので、とりあえず彼の体から離れようとするが、力が強くてなかなか離れることができない。

「いいえ、離しません。初めて見たんだ…君は生きる日本人形。計り知れない価値がある。」

はっ！？また変なこと言っている。

「ちょっと！変なこと言わないでっ！！」

日本人形ってさりげなくひどくないかっ！？顔は市松人形みたいに恐くないし。のっぺりしてない…はず。いや、外人さんからしたらのっぺりか。

でも失礼だよ！さっきも日本人形とか言うし。

「えっ！？さっきも…？」

さあーと顔が青ざめていくのがわかる。

彼の抱き締める力が緩み、私は体全体を見ることができた。

体は小さい。どこもかしこもだ。幼児体系の体は、バスタオルで巻かれてるのみ。

「いやああー！！！！なんで、どうして！！？ここどこ！！？」

もう色々なことが、頭の中を駆け巡る。

やっぱり小さくなっちゃったの！？てかこの格好！！ここどこ！！？

考えたくないよー！！！！気絶したいくらい！！なのに二度目事態に、さすがにそれはなかった。

「…？とにかく私は変なことなど、言っていませんよ。いたって真面目に言っています。」

再び彼を見ると、ニコリと笑っている。

「ひっ！」

輝きを増す瞳に、美しすぎる笑顔。それがもの凄く恐くて、背中にぞわぞわと悪寒が走る。

「怯えなくても、大丈夫ですよ。帰るところがないなら、私が守りますから。大事に大事に保護をし育て、たっぷりと愛でてあげますから。」

「…。」

めっ愛でるゝ!?

後半の言葉の意味がわからなすぎて、いや思考回路が停止しちゃって、ポカーンとしてしまった。

彼はなおも言葉を続ける。

「君は素晴らしい芸術品です。私のコレクションとなったからには、丁寧に扱いますから。ね、安心して下さい。」

「あっ、あっ、安心なんてできるわけないからあああああ!」

私の頭の中の思考回路は、ショートした。

私がコ、コレクション!?

この人絶対に変だからっ!!!

第3話

子ども扱いされる

「どうしたら、安心してもらえるかな？…ああ！とりあえず、服を着ようか。ね？」

「うっ！」

その言葉に、ショートまたは現実逃避していた頭が再び動き出した。
そうだ！

タオルは巻いてるけど、すっぽんぽん。こんな子供の姿だけど、二十歳前の女としては恥ずかしすぎる。

俯いて、もじもじしていると。

「大丈夫だよ。さっき服を準備させたんだ。ほら♪」

「…！！」

びっくりして、声もでなかった。

ベットの上から指をさされた方を見ると、ソファーには、リボンに包まれた大小様々な箱があってびっくりした。

気絶してたのってどれくらいかわからないけど、そんなに時間は経っていないはず。なのにどうやってこの量を…。

「急いで買いに行かせたからあまり集まらなかったし、君に似合うかわからない…。今度買い物に行くから、これで我慢してくれない…かな。」

頭上にあっただはずの彼の顔が、私の目線の位置にある。

私の反応を見て、申し訳なさそうに私を見つめる。

紫の瞳は心なしか潤んでいて、段々と眉尻は下がって来るし！

なっ泣いちゃいそう！？嘘っやだ！どうしょっ！！！

「違うんですっ！とんでもないんですう！うっ嬉しいですっ！！有り難く着させて頂きますっ！」

あわあわと答えた。

もう、この破壊力抜群の美形しょんぼり顔にノックアウトされました。

「よかった。」

ホッとしたような彼の言葉も尻目に、慣れない子供の体で、んしょっと高さのあるベツトを降りてソファアに向かった。

一番近くにあるピンクの箱をとりあえず開けると、中からでてきた

のは半袖のワンピース。上の部分は白で袖はパフスリーブ。スカート部分は桃色でふんわりとしている。

「わぁ」

とっても可愛くて、思わず声が出してしまった。こんなに着たことないや。自分に子どもが生まれたら、一度でいいからこんなに着せたいなぁ。

「気に入った？」

いつのまにか、美形さんはこちらへ来ていて、ニコニコとしている。キラキラオーラ満点だ。

「うん！」

女の子だもん。気に入らないわけない。美形さんの笑顔にもつられて、へらぁと締まりのない顔で笑い返した。

「じゃあ、着替えよっか。はい、バンザイして。」

「へっ？」

また変なことを言った気がする。

「後ろにファスナー、前にはボタンも付いてるし、一人じゃ着替えは大変だから、手伝うよ。」

今度は無駄に色気をたっぷり含んだ眼差しと、キュッと口角を上げた笑みを向ける。

こんな色気にまっ負けないからっ！

「大丈夫ですっ！」

「遠慮しなくてもいいんだよ？」

私を捕まえようと、大きな手が、左右から伸びてくる。

「遠慮なんかしてませんっ！」

顔を真っ赤にしながら、彼の手から逃げるようにじりじりと後退する。

目線を外すまいと、ものすごく高い位置にある彼を見上げたまま。

「意地っ張りですねえ。」

「えっ！」

彼の顔が急に暗くなって見えなくなり、辺りが闇に包まれた。

ヒョイツ

そのまま脇に手を差し込まれ、クレーン車で引き上げられるように彼の顔の高さまで上げられた。

「下ろしてー！自分でできるからっ！」

このままじゃ強制的に脱がされると思ってジタバタするけど、彼の私を掴む手はびくともしない。

「ふふふ。本当ですか？」

こいつ、私の奮闘する姿を見て笑ってる。肩なんか揺れてるし、振動が手から伝わってくるもん。

「こうみえても19歳なんだからっ！一人でできる！」

「ふっ。ふははは！...！わかりました。小さいながらも、立派なレディなんですネ。」

絶対信じてないし、子ども扱いしてる！

いや、この体だとそう見えても仕方ないか。

「じゃあ。同じ女性ならいいでしょ？…よいしょっと。」

私を抱っこする体制に変えようと、ベットに舞い戻り側にあったベルを鳴らす。

「失礼します。お呼びでしょ…。」

扉から入ってきたのは、彼と同年代くらいの茶髪の男の人。彼みたいな華やかさや色気はないけど、真面目そうでスポーツマン風でカッコいい。

そんな彼は、私たちを見た瞬間固まってしまった。目なんか飛び出そうだ。

彼の反応を見ると、わたしたちの様子はどこかはわからないが不味いものがあるのかも。

「トッド。悪いが、エリカを呼んできてくれ。この子を着替えさせたい。」

「…。」

「トッド？早くしてくれないかな。レディがお待ちだ。」

なんか、声色が変わった？と思って彼の顔みるが、心臓に良くない笑みがあるだけ。

「軽くて、柔らかくって、温かいですね。」

そして、さっきより至近距離で見つめ会う形になってしまったから、余計にドキドキしてしまう。

ドキドキが止まらなくって、恥ずかしくってすぐに目線をトッド？さんに戻した。

「ひいっ！あっす、すぐに呼んで参ります。」

トッドさんは、慌てて部屋を出て行ってしまった。なんか怯えてなかった？

「じゃあ、私は外に出ていますよ。私の日本人形…。」

ゲッ！また日本人形と言われて、ムスツとしてしまった。

「大丈夫。すぐに会えますよ。」

チュッ

「ふえっ！」

思わず、キスをされた額を押さえる。キスをされた部分から、熱が広がりどんどん顔、体が熱くなっていく。

「そんなに可愛くて拗ねられるなんて、嬉しいですね。離れるのは短い間。すぐに、会えますよ。」

色々ちがーう！そうじゃないから！

そんな理由で拗ねてないし！

それにキスなんて、しなくていいから！

かつ仮にも私、子どもなんだけどっ！

訴えたいことは、山々ある。けれど私はキスの余韻で頭がまわらず、金魚みたいに口をパクパクと動かすことしかできなかった。

第4話

収集される

エリカさんはピンクみが強い茶髪の美人のメイドさんのようで、ニコニコしながら私の着替えを手伝うと、話す暇もなく部屋を辞していった。

美形さんが待ちきれなかったのか、ノックもせずに部屋に入ってきたからね。まったく、着替えてたらどうするの。

「可愛い…。」

「えっ？」

むぎゅっと、抱き締められて、美形さんはベットへと座った。私は、彼の膝の上で横抱きにされている状態だ。

「あのっ！話をしたいことがあります。だからこの態勢は…」

は、恥ずかしい態勢だ。こんなじゃ真面目に自分の事情が話せない。

「私は構いませんよ。こんな可愛いものを抱きながら、お話まで聞けるなんて…この上ない贅沢ですから。」

恍惚とした表情。

猫を撫でるように、手の甲で私の頬、顎、首筋までを往復される。

そして、うっとりとしたような笑みが私に向けられ、痺れるような感覚が私を蝕んでいく。

私は、彼の笑みを壊したくなかった。

そのままの態勢で自分の事情を、彼に話し始めた。

なんとここは異世界で、ペルノヴァという国の王都ルティと言うところみたい。

信じられないことに、純粋な黒髪で黒目の人はいないらしい。いても、濃緑、紺や藍色がかった黒系の髪や瞳。

その特徴を持つ人は、月下の民と呼ばれているようだ。でも昔ほどいないらしく、少数民族になってしまったらしい。

私は、月下の民とは違うから話が噛み合わなくて、違う世界の日本から来たと理解してもらった。

そして驚くことに月下の民は、ニホン：日本から来た人の末裔と伝えられているそうだ。美形さんから、着物はあるかとか、自分が着ているのと同じかって聞かれたから間違いないと思った。

「では、ニホンから来たのはなんとなく理解したとします。しかし百歩譲って、あなたが19歳とは信じられないです。」

「どうしてもですか？でもこんな大人びた子どもいます!？」

でも、体が小さくなったことは信じて貰えなかった。

「確かに見た目に反して物凄く、頭が良いのはわかります。でも19歳にしては、ちょっと：足りないんですよ。」

濁しちゃったけど、：って頭とか知能とかですよね。

真面目に困った顔で、言わないで欲しい。これでも、大学受験突破して、都内の大学受かったのにい。結構、傷つくよ。てか、日本の大学生を敵にまわしたし。

「落ち込まないで。いつもレディに振る舞う貴方です。精神的にレディになる日も近いですよ。」

って精神的なところ！？私、子ども扱いってこと。もお嫌だ。友達にも言われたばっかだし、本当なんだ。

「ん。とりあえず名前を教えてくださいませんか。」

「名前…。」

そうか、忘れてた。とりあえず、名前を名乗るのが礼儀だね。頭の中ごっちゃで、すっかり飛んできた。

「私は、リュカ・ブルーム。リュカって呼んで。」

「リュ…カ？リュカ。」

そう呼ぶと、満足そうに頷いた。

「そう。君の名前は？」

「私は…。…！！！！あれっ？」

藤本雪乃って名乗りたいのに、声…というより言葉が出ない。

「なんで！？どうして？」

「何か、身の内に封がされているようですね。でも名前がないと不便ですし…。では私が代わりの名を、この世界での名を与えましょう。」

「リツカです。どうですか？この世界での愛称と思ってください。」

迷うことなく、すんなりと出てきた名前。響きも可愛いし、しっくりとくる。リユカにリツカと呼ばれて、温かくて懐かしくて、満たされた気持ちになってきた。

「リツカ…。」

自分でも名を唱えてみるが、本当の名前と同じようにしっくりとくる。

「受け入れてくれますか？」

リユカは、待ちきれないというような顔をしている。まるで、大好きなものをお預けされた子どもみたいだ。

紫の瞳は熱を含んでいるように熱く感じた。私の心を溶かすように、じいーと私を見つめる。

見つめあっているとリユカの表情は急に曇りだして、悲しそうな、泣きそうな顔に変わった。

「私は君をずっと待っていたんだ。ずっと探していたのは、君だっ

たんだと一目で確信した。」

懇願にも似た、悲しそうでひどく甘い声。私を横抱きにして支える大きな手には力が込められ、熱を通り越して汗ばんでいる。

リュカは私を知っているの？だから、リックと言う名がしっくりくるのかな。受け入れたら、教えてくれる？悲しい顔を笑顔にしてくれる？

「うん。」

コクンと頷くと、光に体が包まれて体に馴染むように消えてった。

「よし。所有登録完了。」

ん？

目をパチパチとさせながら、眩しさ満点の笑顔のリュカを見た。

「私が美術品に所有の印を付ける時の魔法を掛けたんだ♪」

「はあ…?」

なんとなくスルーしてた、リュカの意味不明な発言。この時程、今

までの発言をスルーせずに聞き返せばよかったと思わなかったことはない。

「目録登録の場合は番号を付けるんだけど、生きてるから名前ね。これはね、美術品を保護するだけじゃなくて、盗難防止も兼ねている私独自の魔法なんだ。」

魔法。この世界は、魔法があるんだ。ふっ、ふーん。その魔法、意味がわからない。

「私はね、ニホンに関する美術品の収集家。君はニホン美術の中でも、一級品の価値がある日本人形と瓜二つ。」

スツと細められた紫の瞳に、クスリと零れる妖艶な笑み。

だらだらと、冷や汗が流れる。獲物が肉食獣に仕留められる瞬間って、こんな感じに違うない。

「えっじゃあさっきの言葉は？名前に何か意味はなかったの？」

「名前はね、私の名前に似せてみたんだ♪私の物ってわかりやすいし。それに、大好きな日本人形が生きてるなんて、君を見てそれこそ私が待ち望んでた物に違いなんて直感したんだ。」

「えっ、えー！！」

そういうことだったの！？何て言う勘違いしてるの：私。

「名前も気に入ってくれたみたいだし、良かった。一応生き物にも対応できるようにはしてるから。例えば飼い主がペットを好きだっ

て言う気持ちを、ペットが理解できないと掛からないんだ。名前は初めての愛で、心のこもったプレゼントだし、名付けるときに魔法を掛けるんだ。」

愛とかって美術愛で、絶対意味違うでしょ!!!

でも、反論をしようとした時だ。

「今日から君は…だよ。」

「えっ？」

なんか反論する気力が一気に低下した。空耳かなあ…こんな至近距離でも、そんなことあるんだねっ！

「君は私のコレクションだ。」

今まで一番じゃないかって位の笑顔。しかも、色気ある美形男子。

これには、完全に金縛り、眩しすぎて目の前…この先の未来がクラ

ツシュした気がした。

しばらく固まっていた、そのまま…彼の言葉を借りると、その状態を鑑賞されていた。

第5話 保護される

むにむに…むにっ。

「リツカ、大丈夫ですか？」

「あうう？らに、してるん、でひかつ！」

リュカに頬をつままれたり、伸ばされたりして上手く喋れない。

「あまりにも動きがないもんだから、頬とか色んな所をつまんでいたんだよ。どこもかしこもお餅みたいに柔らかいね。」

クスリと笑うリュカ。

「どっどこもかしこもー！？いやいや、それより所有印とかどういうこと！？私コレクションとかじゃないですっ取り消して下さい！」

突っ込みどころや問いただしたい所が満載なんだけど、それじゃ話が進まない。

「ふう。リツカはとても危険な状態なんです、取り消すことなんてできませんよ。」

ため息をつきながら、眼鏡をかけ直すのをきっかけに、今までとは打って変わって真面目な表情に変える。

この世界の人は神の加護の元、呼吸をするように、世界に満ちている魔力を身の内に取り込んでいるらしい。しかし子どもと言うのは、魔力が不安定な時期で、体に必要な魔力が上手く取り込めず、弱い状態。その上手く取り込めない魔力は、親や近くにいる親しい人を介して補うらしいが、そのメカニズムは定かではないらしい。

私は異世界から来て、この世界では言わば産まれたての状態。しかも魔力を取り込むためには、名前が必要になってくる。名前は存在を確かなものにし、魔力を取り込むためにこの世界に根付かせる意味合いがある。

名乗ることができない私は根付けず、生きていく上で必要な魔力の供給はもちろんできないし、非常に危険な状態らしいのだ。

「だから、名付け親の私を介して魔力を供給している状態なんですよ。ちょっと難しかったかな？」

「ううん。とっても危ないことはわかりました。助けてくれたことには、感謝しています。けれど…。」

「けれど…何かな？」

「それと、所有印の話は別でしょっつっ！！！」

油断も隙もない奴。誰もが魅了される笑みを浮かべて、結構自分の思い通りに動かしている気がする。

「ははは。リツカは鋭いね。」

そう言いながら美貌の顔を近づけてくる。

「リツカはお利口さんだけど、気づいてないみたいだね。」

「なっ何をですかっ？」

「こんなちっちゃな体で、どうやって生きていくの？」

ツンツンと、鼻をつつかれる。

「それは…」

俯いてしまう。子どものわたしに今は何ができるんだろ。

「リツカの世界は平和のようだけど、こちらの世界はある程度危険だよ。子どもになんて甘くない。悪い大人だって沢山いる。」

「…。」

「その点私は違う。一緒に居てくれれば、君を守るし、苦勞なんかさせないし、幸せにするよ。君が私の物になってくれればね。」

見上げると、眼鏡の奥の目がすうと細められていて有無を言わせないと言った雰囲気だ。

「リツカ：所有印なんて言っちゃたけどあれは保護した印でもあるんだ。選択肢はないと思うんだけど…私に保護させてくれるね？」

「じゃあ…はいつて返事をしたら…。」

これは、ちゃんと言わなくっちゃ。

「返事をしたら…？」

どんな答えが返ってくるか、怖い。

「私は、日本に帰りたいんです。子どもの姿から、大人にもどりたいんです。願いを叶えてくれますか？」

「リツカ…。私はそれが出来ないから、保護しようと言っているんだ。」

「…できない?」

「確かに体を小さくしたり、大きくしたりする高度な魔法があるけど、リツカにはそれがかかっているように感じない。何より真の名が分からないから、魔法がとても掛けずらい状態なんだ。」

体は元に戻らない?でも、元の世界に帰れば治るかもしれない。

「それにね、異界に渡る為の術は、失われた秘術って言われているんだ。これを使える魔導士は今は…いないんだ。」

「どうして、そんな酷いこと言えるの?嘘だよね。」

ボタボタと涙が零れ落ちる。

「嘘ではない。誰だってそう言う。何百年前にニホンから来た者はあるが、帰ったと言う話は聞いたことがない。」

「ううう。そんなっお、かあさんや、家族にっもう、あっあえないのっ?友ら、ちにもっ?」

「リツカ…。」

悲しすぎて、涙が止まらなくて、上手く呼吸ができなくて苦しい。

「はっくう！ぐ、るしい。くるしいよお…。」

「リック！しっかりするんだ！！私の目を見るんだ！！」

リュカの声が頭に響く中、泣き続けた。

第6話 保護者sideリュカ（前書き）

リュカ視点です。

第6話 保護者 side リュカ

泣きすぎたのか、名が明かせず体が弱いせいなのか呼吸が乱れて危険な状態だった。

私は抱き締めて、大丈夫だからと言い続けて、宥めて、背中を擦ることしかできなかった。

リュカはなんとか落ち着いてくれた。

その後は泣き疲れたようで、夕食も取らずにぐっすりと眠っていた。すやすやと私のベッドに眠るリュカ。赤くなった目蓋は痛々しいが、つかの間の安らぎを得ているだろう。

この子は、不思議な子だ。

まだ10歳にも、満たないのにひどく大人びている。ある程度ちゃんとした教育もなされているようだった。しかし、未だに19歳とは信じられない。この年齢で、大人並みに知能が高い者はいるから。

異世界から来たことは、たぶん本当だろう。確実に。こんな容姿の子はいないから。

しかし、なぜ名が名乗れないのだろう。天上に住まう神々が、この小さくて、か弱い幼い子に何の試練を与えたのだろうか。これは神殿に行つて、神々の声を聞くしかないだろう。

そんなことを考えながら、夜はいつもの通り出掛けず、リツカに付き添った。生まれたばかりのように弱く、存在が希薄なりツカを放っては置けなかった。

眠るリツカを抱き締めて、時には手を握りしめて、元気になるように自分の魔力を送る。

小さい頃から、王宮の博物館にある国宝の日本人形が大好きだった。辛い時や悲しい時、それを見るたびに心が救われた。

馬鹿かも知れないが、毎日通っていたらその人形が突然喋りだして動き出しこともあって…大切なことを教えてくれた。昔から見えないものに敏感だったから、人形と話すことが出来たのかも知れない。

大人になって心が曇ったのか、人形と話すことは出来なくなってしまうって少し寂しかったが仕方がないと思った。

私は、これがきっかけでニホン由来の美術品の愛好家または収集家になった。これは趣味の域を越え、あらゆる美術品の鑑定もこなすようになった。

そんな時、私の前に現れたのがリツカ。

私の心は、リツカに驚愕みにされた。

ニホンの美術品の中でも愛してやまない…あの日本人形に生き写しだった。

胸がざわめき興奮した。

黒髪と黒目に白く滑らかな肌。桃色の頬に桜色の唇。鈴のような声。愛くるしい顔立ち。

月下の民と同じようで違うのは、その祖先が持っていた漆黒の色。この世界の人間にはない色。

私はあの子をリツカと名付けた。

リツカは、あの人形に付けてた私だけの名前。文献によるとリツカは六花、むつのはなとも言い、雪の異称だ。

雪のように白い肌で、その雪の結晶の花のように美しいからその名にした。

そしてリツカには詳しい説明もせず、私の印を付けてコレクションにしたのだが、それには色々な理由があった。

リツカはとても平和な世界から来たようだから危機感が薄いし、何よりこの容姿と子どもの身で、この世界で生きるには辛いし危険過ぎた。

この世界には、ニホンの物、月下の民の芸術品を愛してやまない人は沢山いる。世界で一番収集家が多いくらいだから。そんなことから今あるニホンの美術品は勿論、たまに異界から流されてきたり、発掘されたニホンの物は高値で取引をされている。

しかし闇で取引をされている場合は、物だけではない。

美形と表される少数民族の月下の民で身を守る力も弱い者は、人身売買される危険性がある。もちろん高値でだ

国宝の日本人形と生き写しで、名もなければ後ろ楯のないリツカは、どうなる？ もしも野蛮な収集家買い取られ、そのコレクションにされたらどうなる？ 拐われたら？ …そんなことになったらどんなひどいことをされるのかと思うとゾツとした。

だから早めに手を打ち私のコレクションにして、保護をした。この私の…コレクションとわかれれば、手を出す輩は早々いない…むしろ手を出した者にとっては自殺行為になるであろう。それに何があっても私の印があるから、助けられる。もちろんそんなことにならないように、全力で守るが。

それに子どものリツカを法的に守るために必要な身分もあるし、社会的にも後ろ楯になれる。

幼いリツカには、難しいだろうし恐がらせるから話せなかったんだ…。

「むゝ。おとーさん…おかーさん…。おにい…。」

「寝言か。」

幸せそうな顔をしている。夢の中では、家族に会えているようだ。

子ども独特の温もりと柔らかさを、ぎゅっと腕に閉じ込める。

帰る術がなくてよかったと思う私を許してほしい。

もしかしたら彼女に自分の印を付けたのは、側にいてほしかっただけなのかも知れない…。リツカみたいな存在をずっと待ってた気がするんだ。

どうしてそこまでの気持ちになるかなんて、説明できない。私だつてこの気持ちがわからない…。

でも、あの人形と過ごしたかけがえない時間と大切に思う気持ちとどこか似ている。

これが特別で大切って言う気持ちなのかも知れない。

私の魔力を分け与えた小さな存在が、かけがえのない大きな存在になるのは時間の問題のような気がした。

第7話 気づかされる

あれからどれくらい経っただろう。今までどう過ごしてきたっけ。というか、どうしてここにいるんだっけ…。

ずうっとふかふかなベットの上でぼーとしてる気がする。

体が小さくなったことより、帰れないと言うことが一番辛い。そんな思いに駆られた時は、昼夜問わず無理矢理眠りにつくようにしている。

もう、何も考えたくない。頭と体がダルくて、重たい。

今日も、昼にも関わらずベットで強制的に眠りにつこうとしたときだ。

バンツと扉が開く音がした。ノックも何もない時は、リュカだ。

「もう、我慢できませんねえ。」

何を言ってるのだろうか？別にいいか…私には関係ないし。

しかしバサリとブランケットを剥ぎ取られかと思うと、むんずと横抱きにされた。

「リュカ!？」

ちょっと乱暴な扱いにビックリして、名前を呼ぶ。しかし、リュカは私の声に応ずることもなく部屋の中のある扉を目指してずんずんと歩いていく。

ガチャリとリュカが扉を開ける。
そこは、たぶんお風呂場。

たぶんなのは、湯船が泉のように広くて大きくて、お風呂場の全貌がわからないから。だけど湯気が立ち上り、お湯が乳白色だから、お風呂に間違いないはず。

「うぎゃっ！」

ふわりと体が浮かび、そのまま湯船にダイブしてしまった。

バsshャーン!!!

「ケホッ！ケホンッケホンッ！！」

どうやら、リュカに湯船に向かって投げられたようだ。溺れはしなかったが、少し水を飲んでしまった。

「リュッリュカ！？何するの！？」

振り返ってリュカに聞く。服を着たままお風呂に投げ入れられて、意味がわからなかった。

「これ以上放っておくと、臭います。」

「へ？」

臭うって言った？ますます意味がわからなくて、そのまま固まってしまった。

「リック。あなたは、1週間もお風呂に入っていないんです。私のコレクションとなったからには、この状態を許してはけません。」

「何よっ！私は、あなたの物じゃない。」

本当にムカつく。臭いとかコレクションだとか。こんな、ところに放り投げるなんて、軽く幼児虐待じゃん。

「それに…それに！私がどんな気持ちでいるか知らないくせに！！」

バシャンツとリュカに背を向ける。

苦しい。苦しくて堪らない。生きてるのが辛い。

何もかも全てのことから切り離されてしまった。

家族、友達、日本、地球。

もう私には何もない。

何も…。

「わかりませんね。でも、リツカもわからないでしょ？そんなリツカを見て、私がどんな気持ちでいるか。」

「え…？」

リュカの気持ち…？

ジャバジャバと湯を掻き分けて来る音が、背後からする。

「リツカ。背を向けないで、私の顔を見て。」

ゆっくりと振り向いた。背の高いリュカが服を着たまま湯の中に膝立ちになっていて、さらに身を屈めて私と目線が合う位置にいた。

リュカはとても、とても悲しそうに見えた。目元にクマが出来ていて、その美貌は変わらないが、少し疲れているようだった。

「悲しんでいるのは、あなただけでは。私がリツカを見ているのがどんなに辛く悲しいか…。」

「あ…。」

リユカは私のせいで、そんな顔をしていたと思うのはうぬぼれかな。見ているだけで、胸をギュツとされたように痛くて、痛くてしょうがない。

パシヤツ

そんなリユカに抱き締められた。強く抱き締められて、苦しくて体が痛い。

内と外からギュツと締め付けられて、何かが溢れてきそうだ。

「私の目の前にリツカはいるのに、どんどん存在が希薄になっていく。ごはんも食わず、代わりに私の魔力をどんなに送っても無意識に受け取らないか…体からこぼれ落ちる。まるで死ぬのを待っているようなリツカ…何も出来ない私はどんな気持ちかわかりますか？死がリツカを奪おうとする姿を見せられている私は…！！」

震えるようなリユカの声。

泣いているの…？怒っているの？

顔が見えないからわからない。

「生きる意味がないのなら、私が与えて上げますからっ！私の側でコレクションとしての務めを果たせばいいっ！ただ側にいるだけで

いい。でも、生きて下さい…。」

「リュカ…うつごめんなさい。ごつめんなさい。」

涙が溢れてきた。ずっとずっと自分だけが悲しいと思っていた。自分だけが、傷ついていると思っていた。

でも、リュカにこんな思いをさせていたなんて…。私もリュカだったらきっと辛い、悲しくてどんなにやるせないだろう。

目の前にいる人をこんなに傷つけていたなんて。思い出すと、ここにいるメイドさんや執事さんみたいな人、おじいさんにおばあさん…みんな心配してた気がする。

なんて、私は馬鹿だったんだろう。

私は切り離されてはいなかった。ちゃんとどこかで誰かと繋がっている。

そつとリュカの大きな体に手を伸ばし、ギュツとする。すると、光が私たちを包んだ。

リュカにリツカという名前をつけられた時と同じ光。

『…例えば飼い主がペットを好きだって言う気持ち、ペットが理解できないと掛からないんだ。名前は初めての愛で、心のこもったプレゼントだし、名付けるときに魔法を掛けるんだ。』

あの時は、ふざけるなと思った。でも、今は信じられる。ペットじゃないけど、リュカの気持ちわかったよ。それに名前を通して力をもらってたから…ずっと繋がっていたから、私は今生きていられる。

新しい名前。新しい…いや第2の人生の始まりかも知れないと思った。私は日本にいた過去を忘れず、今を生きていくよ。

「落ち着きましたか？」

「うん。リュカ…ありがとう。もう大丈夫だよ。」

どれくらいの時間が経っただろう。あれから、しばらく泣いていた。その間リュカはずっと抱き締めて、宥めていてくれた。

「大丈夫だから、もう離しても大丈夫だよ？」

リュカは手を離そうとしない。

「うん。元気になりました？」

「なったから！だから離し…」

ここで、抱き締められてから初めてリュカの顔を見た。

さっきまでとは、嘘のような顔をしている。

獲物を見つけた喜びを溢れだしたような、いや仕留めたようなした
り顔だ。

今日のリュカは白いシャツ。胸元はあき、首筋、鎖骨、胸板を通り
湯が滴り落ちる。それにシャツが透け透けで、体に張り付いてる

均整の取れた体に、思わず見とれてしまう。

そんな私に目を細め、追い討ちを駆けるように色っぽく笑いかける。

グハッ：鼻血が出そう！それに、なんだか嫌な予感がする。

「元気になったなら、大丈夫ですね。さぁリック、洋服も含めて隅
々まで綺麗にしてあげます。コレクシヨンの管理も持ち主の仕事で
すから。」

「はっはぁ！？じっ自分でできるからー！！だからはーなーしーて
ー！」

もがもがと抵抗するが、全然リュカの手は外せない。子どもの力だ
から？とにかくヤバイ！ヤバイ！なんとかしなきゃ！！これでも1
9：今年20歳、なんとかしなきゃ：なんとかか…。

「駄目です。1週間何にもしなかったあなたのことは信用できません。手が届かないところまで、きれいに念入りに洗って上げますからね。」

「うっわっひいいい!!!」

こんな第2の人生の始まりってありでしょうか？

第8話

手入れをされる

「ふわぁっ」

「じっとして下さい。リツカ」

今は服を着たままのリユカの膝の上でうつ伏せにされて、泡だらけ。スポンジで優しく洗われてるんだけど…。

「うっん！」

「どうしました？」

口を押さえながら、なんでもないとぶんぶん首を横に振る。

たまに際どいところを洗われて、やんっとかあんっとか変な声が出るようになる。

一応彼氏なし処女な子どもだけど、性感帯みたいなのがあることを初めて知る形になってしまった。こんなこと、こんな姿で知りたくなかったよ！

「ううゝん。」

太ももの裏をスポンジが掠める。我慢するのも苦しい。

「くすぐったいんですか？」

リユカが心配そうに聞いてきた。

そう！それだっ！なんでこの言葉が出てこなかったんだろう。

「そうっ！そうなのっ！」

もう、激しく肯定した。

てか…性感帯とか思っちゃった私。恥ずかしすぎる！いやあああ！
！恥ずかしすぎて、顔から火が…燃えそう！！！！

はっ早とちりして性感帯に走っただけだもん。リュカの変態菌が移ったに違いない。リュカのスポンジの手つきが天性のエロだったんだ！それかスポンジに変態菌が付着、私に感染！

きつとそうに違いない！！

「今日は念入りに洗ってるだけですから。明日からはこんなにしませんよ。」

よかったあ。思わずホツとするが、あれっ？明日も！？明日もリュカに洗われるの！？それはちょっと避けたい！！

「いや明日からは…」

ザバー

「さっ洗い流した後は、髪を洗ってあげます。」

「じっ自分でできるっ！」

さっきのことは湯とともに流され、別な思考に頭を占領されてしま
う。

「あんまり暴れないで下さい。」

「ううゝやだぁゝ！自分で髪は洗えるからっ！」

リュカは、ジタバタとする私をバス用の椅子に無理矢理座らせた。

「さあじつとして、上を向いて下さい。シャンプーが目に入ってし
みますよ。」

「うっ！」

逃げようとするも手遅れ。私の髪からは、わしゃわしゃとシャンプ
ーが泡立つ音が聞こえる。

「はぁ…。」

目にシャンプーが入るのは嫌だ。大人しく椅子に座ったまま、天井
を見上げて目をつむった。

ここにくるまで、リュカにあーんなことやこーんなことをされて、
体の隅々まで洗われてしまって、心身ともに疲れた。

体の隅々まで見られ過ぎて羞恥心は粉々になったし、こんな幼児体
型の体でギヤーギヤー騒ぐのも馬鹿らしくなったというか虚しくな
ってきて裸を見られてもどうでもよくなってしまった。

さよなら、19歳の羞恥心。着実に子どもへの道を進もう。

「はうゝ。」

思わず、変なため息が出てしまった。これは頭を洗うリュカの手が気持ちいいからだ。

地肌をマッサージするように指の腹で優しく円を描き、時にはツボを押すような力加減が絶妙なのだ。さっきまでの疲れが一気にとれてくる。

サロンのシャンプー係さんより上手い気がするなあ。

「うゝん。なかなか泡立ちませんね。お風呂に入ってなさすぎて、髪も地肌も汚れてますね。それに毛先も傷んで、硬い。」

「うっ…!」

厳しい!乙女には痛い言葉だ。

何せ1週間振りのお風呂なのだ。汚れの溜まり具合、恐るべし…!

髪の痛みは髪を染めまくってるからです。それにコテで巻き巻きしてるから、熱で硬くなってるし。

ちなみに今の髪は黒。異世界フィルターで、髪の染料が落ちたのか…どうせなら髪もバージンな傷みのない子ども髪にして欲しかったなあ。

「どこか痒いところはありませんか？」

「ないですー。」

これは、サロンに行って一番困る質問だ。絶対言わないけど、たまに痒い所があったりする。でもリュカの手つきは素晴らしく、テクニシャンなのかそんなところなんてない。

「むーん。気持ちいい。」

「それは、良かった。」

それにお風呂の入浴剤の甘いフローラルの香りと、シャンプーの爽やかなアロマ系の香りが混ざりあって、優雅な気分なのだ。きっと高級な入浴剤にシャンプーに違いはない。

リュカって高級なサロンの美容師さん？

でも部屋もお風呂なんかも大きくて超豪華だし、美容師でこんなとこ住めるのかな？あれっ収集家とも言ってたよね？

「ねーねーリュカー？」

目をパチリと開けて、頭上のリュカに声を掛ける。

「どうしました？」

「ここってリュカの家？リュカって美容師さんで収集家なの？」

やっぱり本人に聞いてみるのが、手っ取り早い。

「ふふふ。確かに私の家で美術品の収集家ですよ。でも美容師って言われたのは初めてです。」

「だってシャンプーも入浴剤も高級そうだし、髪洗うのが上手いんだもん。言うことも美容師さんみたいだし。」

「どうやら、美容師さんじゃなさそうだ。じゃあなんだろう？」

私の表情を読み取ったリュカが、少し考えてから答えた。

「ニホンの職業にあるかわかりませんが、色んな美術品の鑑定業や調査と研究をしています。あとは…なんて説明をすればいいんですかね。なんでも屋かな。」

「リュカって、スゴイね。お仕事、いっぱい頑張ってるんだね。」

リュカは、きょとんとしてしまった。何か変なこと言ったかな。

「それでも一応貴族ですし、だからこんな家に住んでいるだけです。よ。」

さらっと言って述べたけど、なんとなく納得できた。リュカにはなんとなく品があるもんね。

「でもさ、貴族だからってちゃんと仕事をしなきゃ立派な家に住めないでしょ？」

とってもきれいで豪華なお屋敷。きっとそれなりの責任のある仕事をしてるんじゃないのかな。

「リツカは、本当に嬉しいことを言ってくれますね。」

本当に嬉しそうな顔。仕事大変なのかな。もしかしたら、こんなことを言う人がいない…？私で良ければお仕事お疲れ様って言ってあげようかな。

「本当にリツカは、可愛いですね。」

チュッ

おでこにリュカの柔らかい唇が落ちてきた。

「ふっふえ！？ちょっとリュ…。」

「さっ洗い流しますよ。じっとして目をつむって♪」

抗議しようと思ったのに、シャワーハットが必要ですネと言う言葉を最後に、またもやお湯に流されてしまった。

「つるつるだあ。」

ただいまリユカに横抱きにされ、お風呂から脱衣室に移動中。

スーパーマンのように腕を伸ばして触れる。イケメンの手により磨かれた体は本当にすべすべ。子どもだから、毛なんてなりを潜めるから余計にだ。いや子ども特有の美肌でも、ここまではいかない気がする。

「蒙古斑がないんですねえ。珍しい。」

そんなことを思っているうちに、椅子に座ったリユカの膝の上うつ伏せに乘せられる。

小さい頃はあったのに、今はないんだ。でも蒙古斑とかよく知ってるな、外人さんの口から出るなんて不思議な感じだな。

むにゅっ

「うぎゃっ！」

今お尻になんか。なんかあたたった。おでこにされたのと同じ柔らかい感触。

キッキスした？

なんかぱくつとまではいかないけど、お尻のお肉を軽くはむつとされたよ!？

「可愛いお尻ですね♪」

左横に顔を向けて見上げると、悪びれもなく鮮やかな笑みを浮かべるリュカ。

「リュカの馬鹿 ああ！！！！」

キッと睨みつける。

「私としたことが…。」

どうやら反省してようだって…ん？

「もし蒙古斑があっても、可愛いお尻ですよ。」

「ちーがー！！！！！リュカのへっ変態いい！！！！！」

子どもや赤ちゃんのぷりんとしたお尻が可愛いのはわかるけどさ。

でも、子どもにはして良いことと悪いことがあるでしょー！！

ピカピカでクタクタのなんとも言えない状態の私と超ご機嫌なリュカが出来上がりました。

第9話 アシスタントになる

「ふわぁ〜すごい！」

リュカに手を引かれ連れてきてもらった先は、屋敷の離れにある鑑定室。

屋敷の離れはニホンに関する美術品の鑑定の作業場かつ收藏場所。

つまりリュカの仕事場に遊びに来たのだ。

最初離れに来た時は建物に日本な雰囲気は微塵もないし、本当に日本由来のニホンの美術品があるのかなと思った。

けれど扉の先広がったのは、懐かしいような新鮮な素晴らしい美術品。

壁には掛け軸や棚に色々な小物。いろあざやかな着物が何着か、屏風のように飾っており、甲冑なんかがある。

椅子はレトロな深紅のビロード張り。テーブルもそれに合わせた優雅な細工が施されてあった。

真ん中には、大きな一本杉まるまるで出来たテーブル。沢山の年輪がかなりの樹齢が経ったものだと同わせた。側にはそれに合わせたソファがある。

まるで、博物館みたいな部屋。異世界のニホンの美術品は日本の美術品で間違いなさそうだ。

「私はここで、仕事をしますから。好きに見ていいですが、あまり触れないこと。」

「うん！」

博物館では間近に見れない美術品に、思わずはしゃいでしまう。

リュカはそんな私を見て笑うと、さっきの椅子に腰を掛けて仕事を始めた。

私はと言うと大きな部屋を巡る中、農民の生活というジオラマがあってそれに目を奪われていた。日本でもこんなの見たことない。素朴で手作りの温かみある作品。盆踊り、農家の家の模型、炉、稻刈りの様子など細工は細かいし見ているだけで楽しい。

ジオラマに熱中をしていたが、あまりにも静かな室内に不安になってふと、リュカを見た。

今日は、ギリシャ人のようなワンピースという感じの服に、茶色のベルトと革サンダル。

メガネをかけて見つめる先は浮世絵。その美人画を一枚一枚を、情熱的なまなざしで見つめる姿は、真剣そのもの。時おり眉をひそめて、ため息をつく姿は何だか色っぽい。

いつもとは違う雰囲気にくらくらしそうだ。ドキドキしすぎた心臓を落ち着かせる為に、リュカから目を反らすとうっすらと開いた扉が目に入った。

なんとなく惹かれるものを感じて、その扉に駆け寄り中に入っている。

「げっ！？何これっ…」

言いかけて慌てて口を塞ぐ。大きな声で、リュカの仕事の邪魔をしちゃいけない。

そこには、書類や本が連なる山々があった。歩く場所は辛うじてあるぐらい。しかも埃があちこちにある。

大学の教授の部屋もカオスだっけど、こっちの方がヤバイ！！一歩間違えればごみ部屋だし。

「こんな部屋に惹かれるなんて、私の感覚は狂いすぎだしっ。」

そんなことをぶつぶつ言っていると、1つの本が目飛び込んできた。

「漫画だ！」

しかも大好きな漫画。高校生の同居恋愛もの話だ。側には、埃を被った1巻から全巻全てあった。私は場所をなんとか確保し、座って読み始めた。

「んゝ揺れるよね。」

くっつく人はもうわかっているんだけど、2人の男子の間で揺れる主人公。何度見ても飽きない。

チヨンチヨン

「んゝ暗い。」

チヨンチヨンチヨン

いいところなのに、さっきから肩がムズムズするし手元が真っ暗になった。肩を見ると、絨毯が私の肩を叩いていた。

絨毯？ えっ絨毯！？

「きゃあああああ！ ポルターガイストオオ！！」

絨毯が動いている！

信じられない！！ 恐すぎる！

私の背をはるかに越える大きさ。手元の暗さは、大きな絨毯が影を作っていたからだ。それに今にも私を襲いそうだ。

思わず後ろに飛び退くが、後ろには分厚い本が沢山山積みになされていた。高さは全て1メートル以上。立っていれば問題ないが、座っている子どもには凶器のような代物たち。

崩れてきた本に私は身を庇うことも出来なかった。

ドガドカツ

バサバサツ

「クッ！痛っ…」

…くない。

どうしよう。痛くない。ポルターガイストの揺れで本が崩れて、その一撃必殺が脳天に直撃してぽっくり逝ったから痛みがないんだ。

辺りは真っ暗。何も見えない。ここがあの世界？やだ。もっと素敵な所だと思ってたのに。

その時だ。

私の元に、光が差し込んできた。

天国へのお迎えが来た。良かった、こんな暗い所にいたくない。

バサッバサバサッ

天使の羽の音までする。

「だっ大丈夫ですかリツカ!？」

現れたのは大天使リユカ：って違うでしょっ私!？どうやら気分だけあの世に行きかけてたようだ

リユカは本をバサバサと寄せて、床にうつ伏せになった私を引き上げると、自分の膝の上に乗せた。

「怪我はないですか？」

パッパッと私の服や髪についた埃を払うリユカは、心配そうに伺ってきた。ちよっと咳込みながら大丈夫と答えるとホッとしたようだ。

「よかった。ドノヴァンがリツカを助けてくれたんですよ。」

「ドノヴァン？」

どうやらドノヴァンと言う人が私に覆い被さって、本などから庇ってくれたらしい。

後ろを振り返ると、埃まみれになりながら華麗に紳士らしくお辞儀をする絨毯がいた。

「ポルターガイストオオ!?!」

また絨毯が動いてるっ!? 本格的に頭打ったかも! 恐すぎて涙が出そうになる。心霊関係は本当にお手上げなのだ。

「ははは! ドノヴァンは意思を持った魔法の絨毯なんだよ。ほらリツカに恐がられてしょげてますよ。」

「あっ。」

魔法の絨毯は、絨毯の端についたフリンジを手のようにしてイジギとしていた。その姿は人間みたいで、心がズキンとした。助けてくれたのに、酷いこと言っちゃった。

リユカから離れて絨毯の側に寄った。

「あのゴメンね。助けてくれてありがとう。ドノヴァン?」

頭を垂れるドノヴァンを下から覗き込み、首を傾げて呼び掛けた。そして、埃まみれのドノヴァンを優しく払う。助けてくれたお礼だ。

ポワン

絨毯から、そんな音がした気がした。

「どうやらドノヴァンも…のようですね。」

リユカがポツリと呟いた。

「ん？ あっあのーリュカ。こんなにしちゃってごめんなさい。」

ドノヴァンの埃を払い終わると、振り返ってリュカに謝った。元々汚い部屋をさらに酷くしてしまった。

「大丈夫ですよ。私の管理ミスもありますし、何よりもリツカにケガがなくてよかった。」

リュカは私を引き寄せ、ぎゅっと抱き締めて頬擦りをする。

「でも…。リュカ、お詫びにこの部屋の片付けをさせて欲しいの。私日本語もこっちの言葉も大丈夫だし、書類とか本の整理が出来るし。タダで居させてもらうのも悪いし、少しでもお手伝いがしたいの。」

本当に今日のことも、タダで暮らせてもらってるのも申し訳ない。

「リツカ…。そんなことを思っていたんですか？ ただ側にいてくれるだけで、私はいいですよ。こんなに大切に思っているのに伝わりませんか。」

リュカは私のおでこに軽くキスをすると、さっきよりも強く抱き締めた。

「リュカ…。」

何でリュカは、こんなに優しいんだろ。私は、あなたのコレクション以上だと勘違いしそうになるよ。

「でも…お願いっリユカ！」

コレクションだからこそ、それ以上の働きたいの。リユカから体を離して、じっと見つめた。

「はあ。わかりました。リツカは、今日から私のアシスタントです。でも条件があります。」

「本当に！？嬉しい♪ありがとうございますリユカ！」

嬉しすぎて思いっきりリユカに抱きついた。

でも条件ってなんだろう？

「まだ早いですよ、リツカ。いいですか。無理や危険なことをしないこと。必ず先輩アシスタントの指示を聞くこと！」

「うん！ちゃんと約束するっ！！」

「よし。ではドノヴァン。リツカを頼みましたよ。」

ん？何でドノヴァンに頼むんだろう。よくわからなくて、リユカに向かって首を傾げた。

「リツカ。ドノヴァンは私の優秀なアシスタントです。日本語も出れますし、大抵ジェスチャーでわかりますが筆談で会話も可能です。それに力持ちです。ほらあんな風だね。」

リュカが指をさす方を見ると、沢山の本を乗せたドノヴァンが華麗に空を飛んでいた。しかし…。

「ケホンッゲホッ！目が痛い！」

「クッ！！ドノヴァン…リツカと…嬉しいからって張り切りすぎです。」

ドノヴァンは嬉しすぎて、狭い室内をヒュンヒュンと高速で飛び、空中で沢山の埃を舞わせてしまっていた。

歓迎されてるのは嬉しいけど、ドノヴァンが先輩で大丈夫かな？

あってもあのスピードで本を落とさないのはすごいかも！

第9話 アシスタントになる（後書き）

補足

異世界では人間はなかなかリツカのように来ませんが、漫画や地球の物：特に日本のものは、異世界のとある場所に流れ着きます。

第10話 我家のお姫様 side リュカ

懐中時計を見ると、午後3時すぎ。

軽く休憩を取るために、鑑定室での仕事を引き上げて書庫にいるリッカの元に向かった。

「リッ…」

リッカと呼ぼうとした時だ。少し片付いた部屋のぽっかりと空いた空間にリッカが、ドノヴァンを枕にして眠っていた。

ドノヴァンは、私に向かってシーっ言う仕草を送っていた。

そっと近づくと、すやすやと眠るリッカ。起きてるときとはまた違う、愛らしい寝顔に頬が緩む。

一体いつから眠っていたのだろう。

リッカを起こさないようにそっと抱き上げた。いつものように、可愛らしいリッカの頬に口付けしようとした時だ。

「ドノヴァン…。」

ドノヴァンがそんなことをするなど、猛抗議しているのだ。

「チッ…。」

思わず舌打ちをしてしまう。

ドノヴァンは、リツカにぞっこんなのだ。まあ誰もを魅了するリツカに惹かれるのは仕方ない。でも、私に対して小姑のようにうるさいのだ。

やれキスするな、ベタベタするなとか色々言われている。長年の付き合いでジェスチャーだけでコイツの言い分が分かるが、この時ばかりはそのことが忌々しくてならない。

リツカを愛でている最中に、本当に無粋な奴だ。

今だって私に対して、部屋まで運ばせろと訴えてきている。

「今日は私が運びます。この前運びましたよね？」

冷ややかに伝えると、ドノヴァンはムツとしたが納得したようだ。

そのままリツカを抱きかかえ、自室に向かおうとした時だ。コツンと足元に1冊の本が当たった。

リツカを片手で持ち、開きかけた読みかけの本を持ち上げた。

「お姫様と彼1…。」

これは、1冊完結型でシリーズかされている我が国で人気の恋愛小説だ。どうやらリツカは、これを読んでいるうちに寝てしまったらしい。

リツカは今年7歳と聞いたが、その能力は恐ろしい。この部屋の資料整理をなんなくこなし、テキパキと動く姿にはビックリしてしま

う。でも作業の合間にこんな本を隠れて読んでいたかと思うと、子どもらしい行動に安心する。

「この1巻の内容は何だったかなあ。」

母がこのシリーズを愛読していて幼い頃何回も聞いていたのに、思い出せそうでもない。そんな消化不良にも似た気持ちを持ちながら、本を携えて自室にリツカを運んだ。

リツカはとっくに寝ているだろう深夜。

夜の都をいつものように巡り、行きつけの高級娼館の1つにいる。

今は特定の女は作らない主義だ。女に本気になれないと言うか、仕事をどうしても優先してしまうからだ。

女は自分を優先させないと、どうにもうるさくてかなわない。特に貴族のお姫様を女としていた時は、それがうるさくて別れることもしばしば。

しかし私は健康的な男。女を抱きたいこともある。

それ以来だろうか。私は高級娼館に通うようになった。特定の女も貴族とのしがらみも作りたくない私にとっては、とても良かった。

元々娼館には私が仕事に必要な情報が溢れているところだったし、たびたび通う結果となっている。

「若様。はい、お水。」

今日は20歳くらいの若い女を抱いた。人懐っこいが、余計な詮索はしなかった女だ。

水を受け取りゴクリと飲みながら、ふと今日のことを思い出した。

「ユーラ。お姫様と彼って知ってるか？」

尋ねるとユーラは、目をキラキラさせて私がいるベットに入り込んできた。

「知ってます！ 大人も子どもも、女の子は皆大好きな本だものっ！」

「1巻の内容が、思い出せなくてな。知ってたら教えてくれないか？」

何だか気になって仕方ない。シリーズの他の作品なら全てわかるから余計にかも知れない。

柔らかで豊満な体を私の腕に擦り寄せながら、上機嫌に話始めた。

「月下の民の娘が主人公で、年上の大陸の民である貴族に淡い恋を抱く。初恋よ。彼女はいつも同い年の月下の民の幼馴染みの男に恋の相談をするんだけど、その幼馴染みの初恋はその主人公。しかも片想いで、ずうーっと見守っていて、読んでいると本当に切なくなるくらい。彼女はそんな幼馴染みの一途な気持ちに段々と揺さぶ

られ始めるの。」

「それで3人は？」

「結局ね、彼女は貴族と両思いになるんだけど、同時に幼馴染みが戦争に行くことになったの。彼女はいなくなって初めて初めて幼馴染みの大切さに気づくの。彼女を愛する貴族は泣く泣く身を引くわ。そして彼女は、幼馴染みの帰還を長い間ずっと待って思いを告げるの！ハッピーエンド！」

「…。」

内容はわかった。けれど何でか知らないが、余計に消化不良になった気がする。

「月下の民と言えばこの世界の美男美女の代名詞だし、王道の王道だけど素敵な話。あっ若様はフラれちゃう貴族のイメージにピツタリだわ！！」

「はっ？」

「背が高くって、とっても美形なの！髪は金髪で瞳は紫で、若様とは違うけど雰囲気なんかすごく似てるわっ！」

ちなみに理由は色々あるが、茶髪にして瞳も茶色くして変装をしている。実際は人物とほぼ同じだ。

「身を引く場面なんか、年上のなんとも言えない…んむう…。」

これ以上聞きたくなかったので、ユーラの口を塞いだ。

「もういい。」

思い出してきた話の内容。

ついつい自分とあの子に当てはめてしまった。そうすると女の話が癪にさわってならない。

「話よりお前が欲しくなった。」

甘い言葉と微笑み。これを女に落とせば大抵は頬を赤らめて黙りこみ、スイッチが入る。

頭に浮かんだ映像を掻き消すために、口づけを再開させた。

「はっん。待って若様。」

「どうした？」

顔を上げて、女の潤んだ目を覗き込んだ。

「若様は彼と違うわ。こんな色気も強引さもないもの。私はこっちのが好きよ？もちろん体もね？」

すうーと体をなぞり、誘うような女の手。甘えた口調だが、悪くない。

「当然。」

私はこのむしゃくしゃとした気持ちは、女を抱くことで発散させた。

あまり娼館で休むこともなく、帰宅した。

いつものようにベッドには入り込み、眠るリッカを抱き締めた。

比べるのも馬鹿な話だが、自分に擦り寄る女とは全然違う柔らかさ、温かみ、甘い香り。これが心地よくて、夜はリッカを抱き締めるだけでぐっすりと眠れるのだ。

眠るリッカを見つめると、7歳にして既に整っている顔立ち。滑らかな黒髪と閉じられた目蓋の奥にあるキラリと光る黒い瞳。

将来の美しい姿が容易に浮かぶ。

大きくなったら私の手を離れて、あの小説の主人公のように他の男の元へ行くのだろうか。

その時私は、どんな思いに駆られるのだろうか。

たぶん…いや確かなのは。

私はあの小説の男のように愛してるからと言って、他の男の元へは簡単に渡したりはしないだろうと言うことだけ。

「おやすみ。リツカ。」

心の霞を払うように結論づけて、私はおやすみの口づけをリツカの頬にして眠りについた。

第10話 我が家のお姫様 *Sidere* リュカ（後書き）

補足

この世界では月下の民以外の民族を大陸の民と呼んでいます。

第11話 若紫sideトッド(前書き)

ほんの少し先の話です。

第11話 若紫sideトッド

静かな午後。私は2階のベランダに佇み、なんとなく屋敷の庭を眺めていた。小鳥のさえずりが、耳に心地が良い。私のお気に入り場所である。

私の名前はトッド・ビューロー。リュカ様の近侍…秘書みたいなことをしている。

本来ならば、普段通り仕事をしているはずの時間。しかし主人のリュカ様がリツカ様を連れて1日お出掛けの為、私はお帰りになる夕方まで暇を出された。

これは私だけではなく、屋敷で働く使用人全員に出されている。勿論必要最低限の仕事をこなした上でだが、皆喜んでいた。

「きゃあああ素敵っ!!」

突然甲高い声が、庭から聞こえた。

我が屋敷の侍女3人組が茶菓子を持ち、庭で優雅にティータイムをするようだ。寛容な主人に仕えた場合、屋敷の者たちは主人が留守

の際屋敷の物を使用することができる。我が主であるリュカ様も寛容な：むしろ過ぎるぐらいだがその部類にはいるので、彼女達は庭園でお茶などと言う優雅なことができるのである。

しかし優雅とは、程遠いのがこの3人：。彼女達は、寄ると触ると女特有のくだらない話を始めるのだ。もうそうなるとキヤーキヤーと騒いでうるさくて敵わないのだが、今日はなぜかそうは思わない。

暇でもあるし、3人の会話を聞いてみることにした。

「あのリツカ様に注がれるリュカ様の熱い眼差し。もう源氏物語を想像してしまうわっ！」

うつとりとした表情で話すのはエリカ。24歳にしてこの屋敷を束ねる女中頭。明るくさっぱりとした仕事のできる女だ。

「リュカ様が源氏、リツカ様が紫の上：。なんて素敵なんでしょう。もう、ピッタリですわ。」

それに頷くのは、アンジェ。歳は22歳だったか。ほんわかとしていて、それを象徴するようなほわほわの明るい金髪を二つ結びにしている。

「源氏が自分の理想の女性に育てていく！まさに、今のリュカ様たちですわっ！それを、この目で見るができるなんて：。」

興奮ぎみに話すのは、パメラ。アンジェより2つ年下だ。切れ長な目、茶色の髪はショートカットで長身の侍女である。

「「何て私たちは幸せ者なんでしょう!」「」

どうやら、リュカ様とリツカ様について話しているようだ。

「なんていう話をしているんだ:。」

全く:呆れてしまう。

私は男なのでそこまで詳しくはないが、確か源氏が義母の藤壺に似た娘:紫の上を引き取り理想の女性として育てていくとか。そして紫の上とは、数多くの女性と関係を持つ源氏にとって最愛の女性である。

実際リュカ様は今年24歳、リツカ様は今年7歳ということで年齢は親子程離れている所など物語と色々違うが:似ている部分もある。

侍女たちは、2人の仲睦まじい様子を源氏物語に例えて妄想話に花を咲かせていた。

私かというと源氏が紫の上を義母と重ね合わせる姿を思い浮かべていた。

「思えば:リツカ様が来て2週間たつのか。」

リュカ様がタオルに包まれたリツカ様を抱きかかえた姿を見たとき、私は驚いて固まってしまった。

あの2人を目の前にした時の衝撃は忘れられない。

肩より少し長い黒髪を揺らし、黒い瞳をパチパチとさせながら私を見つめたリツカ様。

国宝のニホン人形が生きているっ!!

幼い頃からリユカ様の側にいた私は、彼のお気に入り…幼い頃から並々ならぬ執着を寄せているニホン人形を何度か見ていたからわかる。

あの愛らしい顔立ちまで…生き写しではないか。

リユカ様と言えば、心から喜びを溢れださせたような、甘い微笑みをリツカ様に向けていた。

少し違うが、源氏物語に例えるなら、心奪われた日本人形に生き写しのリツカ様を見つけたというところか。

そして引き取られてからは、お風呂もベットも一緒に、自らリツカ様のお髪を整えたり、服を見繕って差し上げるなど、連日の溺愛っ

ぷり。

さすがにリツカ様に対する過剰なスキンシップに、子どもの教育上悪いと思い少し苦言を呈したが…。

『コレクションを愛でたり、手入れすることの何が悪い？』

私が馬鹿だった。この天才…もしくは変人と呼ばれるこの方に普通は通じない時があるのだ。ましてや大好きな日本人形と生き写しのリツカ様にぞっこんで聞く耳などないだろうし。

だいたい、リツカ様のことを説明する為に使用人を集めたときだつてそうだ。

『月下の民の子どもを引き取りました。名はリツカです。私同等の扱い、並びに私のコレクションでもあるので丁重に扱うように。』

この独占欲の表れとも言うべき、コレクション宣言…。

リツカ様は既に自分のものだと言っているのだ。

まだまだリツカ様は幼いし、将来もあるし自分の物扱いしていいのかと心の中で突っ込んだ。

このツツコミどころ満載の言葉に、使用人達はいつものリュカ様の発言だと、皆当たり前のように主人の命に従ったのだ。

まともな感覚の俺が、まともでないようなあの空気感。誰か他にまともな奴はいないかと探した。試しにまともそうなエリカに言ってみたが、大丈夫でしょうとか、考えすぎと言われるだけだった。

確かにリツカ様を大事に思う様子に不審なところはない。むしろ仲が良くて微笑ましいくらいだ。

待てよ。このままでは、源氏物語そのままになっていきそうだ。

まだ幼いリツカ様に対する、リュカ様の独占欲。リツカ様が16歳で成人されたあかつきには、どうなるんだ!?

成人前は父や兄のように接して、その後…。

リュカ様なら、絶対やる。今すでにそれを実行している気がする。

それに親子ほど歳の離れた夫婦は珍しくない。この世界の各王家の歴史を思い出してみると、側室を含めればかなりいるじゃないか。

あれこれ考えると、恐すぎる。

リツカ様は幼いし、まだまだ先のことだ。考えるのはよそう。うん、と無理やり自身を納得させた。

とまあ多少不安はあるが、リツカ様はリュカ様に引き取られて良かったと思う。

詳しい素性は知らないが、ご家族を亡くされてリュカ様が引き取られたということは、後ろ楯や引き取る者がいないということ。

リュカ様が引き取っていないければ、きっとどこかに売られたり、酷いめにあっていたに違いない。

月下の民というだけで珍しいのに、さらに珍しい月下の民の祖先と同じ黒い髪と瞳を持つリツカ様。

加えてあの可愛い顔立ち。

この容姿では普通に生活していても危険だろうし、安全なこの屋敷はリツカ様が生活するに申し分ないだろう。

「はあ。リツカ様は本当可愛いわねっ♪」

妄想話に一段落ついたのか、エリカが紅茶を含み一息ついた。

「私、お世話申し上げるのが楽しくて楽しくて仕方ありませんわっ

！」

エリカやアンジェの言う通りだ。既にリッカ様はこの屋敷の癒しの存在である。

「それに今日お出掛けになる前に好きな御菓子を聞かれて、クッキ―と答えましたら、お土産に買ってくるねと言われましたわっ！あの心遣いとその時の笑顔に、私撃沈しました。」

パメラは頬をこれでもかと言うくらい赤らめている。

リッカ様はあの年齢にして大変大人であるのでビックリする。リユカ様のアシスタントを務めるぐらい優秀な頭脳をお持ちだし。

そして、あのぱつと周りを明るくするようなとびきりの笑顔は誰もが頬を緩ませてしまう。

リッカ様のその魅力に、人は簡単に陥落してしまうだろう。

私もリッカ様が出掛ける前に、いってきますと笑顔でご挨拶されただけで顔が緩んでしまったし、既に陥落している身だ。

楽しそうに会話をする侍女たちの話は続いている。

「そうか。だからうるさく感じないのか。」

リツカ様が来てから、屋敷は賑やかになった。

彼女たちの話はうるさいと感じるくらい静かだった屋敷は、もう過去になっている。それだけリツカ様の存在は大きいらしい。

皆を笑顔にし、屋敷の雰囲気までも変えてしまうリツカ様は、なんだか屋敷の主人のようだ。

そんな皆に愛されている小さな女主人は、初めての王都を楽しんでいるだろうか。

私は侍女たちの楽しそうなお喋りの時間を壊さないよう、静かにベランダを後にした。

第11話 若紫sideトッド（後書き）

※若紫

源氏物語の巻名。源氏と紫の上の出会いから源氏の屋敷に引き取るまでの経緯を書いています。

使用人には両親が亡くなっているリツカを、リュカが引き取ったと説明されています。

第12話 デートに誘われる

「ふわぁ〜。」

私の朝は早い。

子どもの体になったからかな。その代わり眠くなるのも早いんだけどね。

今は大体7時前くらいだろうか。

この世界には地球と同じように時計はあるが、目につくところにはない。みんな蓋がされていて、懐中時計のような小型の物しかない。これは、目につくところに時間を表すものがあるのは良くないからだそうだ。

よってこの世界の人は必然的に時計をあまり見ない生活をしてるんだけど、ルーズな生活を送っているわけじゃない。

たぶん横に眠る彼を除いて…。

絡まるように体に巻き付いてる彼の腕は外れないので、もぞもぞと

体を回転させて向かい合わせになる。

何では知らないが、私は毎日リュカと寝ている。

最初は、散々嫌だと拒否した。

あんな美形と一緒に寝るなんて無理だ。心臓がもたない！

でも、そんな私を抱き上げてリュカが言うの…。

『リュカは、私のことが嫌い？』

リュカが上目遣いで私を見つめる。そんな顔で見つめないで欲しい。それに心なしか紫の瞳が潤み始めてないだろうか。

『うぐっ！あのっリュカ？…ごめんね。だから、泣かないでえ
〜！』

実際泣いていないんだけど、あんな風に泣きそうな顔をされたら無理。断れない。

というわけで渋々了承して今に至るのだ。

「リユーカー起きて？」

私の役目はリュカの目覚まし時計。

リュカは完全に夜型人間で大変寝坊助なのだ。しかも、寝起きが悪い。

そんなリュカに使用人さんにとっても困っていたので、皆のためにも私が起こすようになったのだ。リュカにもすごい喜ばれて、毎日起こしてっようお願いされたし。

「んんんゝわかった。」

いつもこれだ。今ならお母さんの気持ちがわかる。わかったって言っても、寝起きの悪い人は全然起きないんだよね。

「リューカー。ねえ？リュカ。」

呼び掛け続けて、やっとリュカがもぞもぞと動き出す。リュカの腕から抜け出すことはできたけど、本人はさっぱり起きない。

「もおゝ!!」

いつも以上に起きる気配のないリュカにムツとした私は、仰向けになったリュカのお腹の上に跨がった。

「リュカー!!起きてっ!もう朝だよ!」

大きな声を出しながら、ばふんばふんとリュカを揺さぶる。

うん…やっぱり腹筋が結構あるから硬いなんて思いながら。

「うぐっ！リツカ…。わかった、わかったから止めなさい。」

リュカはうつすらと目を開けつつ、顔をしかめている。

寝覚め直後の突然の衝撃には、さすがの腹筋も役に立たないらしい。

「本当に？リュカ、いつもわかったって言うんだもん。」

信用ならないんだから。リュカが完全に目を開けるまで、絶対止めてやらない。

「リツカ。やりすぎですよ。」

ガバッ

急にリュカが起き上がった。

「きゃっ！」

ふわりと体が浮かんだと思うと、視界が反転してベットに押し倒された。

頭上の紫の瞳はどこか気だるそうで、寝巻き代わりのリュカの浴衣がはだけていてその素肌を覗かせている。

そんなリュカに、朝からドキドキしてしまう。

「リツカ。やりすぎですよ？止めなさいと言ったのに止めない子に

はお仕置きですね？」

目を細めて、クスリと笑うリュカ。

「ふっふええ!？」

起こすことには成功したが、やり過ぎたようだ。

「ふっ。んっ。」

声を出したら負けだ。

「リックカ。観念しなさい? ほら、こことここ弱いでしょ?」

「やっ! ダメっ!! 触らないっんんっ!」

リュカには、何度も洗われてるから私の弱いところなんてお見通しだ。

悔しくって睨み付けても、リュカは楽しそうに笑うばかり。

「もう…!」

無理だ。我慢できない。

「ひゃーくすぐったいいいい！」

もう、くすぐったくてしょうがない。

「リュツ、カッ！ぐるしいいゝひゃああああ。」

「ダメですよ。私もリツカに乗られて苦しかったんですから。ほらっ。」

そう言うと、リュカはさらに手の動きを早める。

「やぁー苦しい！リュカーごめんなさあい！」

もう降参だ！苦しくて頬もお腹も痛いし、涙が出るゝ！！

その言葉に満足したリュカは、くすぐるのを止めた。そして息が乱れている私を抱き上げて、向かい合うように私を膝の間に座らせた。

「苦しかったでしょ？」

リュカは、笑っている。本意地悪だ。

「そうだけど、なかなか起きないリュカが悪いんだもん！」

元はと言えば、リュカのせいである。

「それでもリツカのお陰で、だいぶ早く起きれるようになったんだ

よ。それにすぐに私が起きる方法を教えたでしょう？」

にこにこしながら、リュカは自身の唇を指差す。

「そっそれは、絶対無理〜！！」

唇にキスすればすぐに起きるとか、眠りの森の美女？白雪姫ですか？

いや、眠れる森の美男に、白雪王子か。違う違う。そんなことじゃないっ！！

と、に、か、く、だ！

無理無理〜！

彼氏以外の人になんかぜええたいっ無理だから。

「絶対無理だもん。そんなこと言うならもう起こしてあげない。」

「あっリツカ…。」

「ふんっ。」

リュカの言葉も聞かず、プイッと背を向けた。

無茶なことを言うリュカが悪いんだからねっ。

「参りましたね…。うゝん。」

困ればいいんだ。私なんかリュカにドキドキされっぱなしで、いつ

も困ってるんだもん。

「お姫様。本日王都でデートをしませんか？」

「王都!？」

思わず振り向くが、笑みを浮かべるリュカを見て失敗したと思った。

王都デートに釣られてしまった。

こんなに元気なのに、体調が万全じゃないからって外へは出させてくれないかった。それが約2週間。さすがに引きこもるにも、限界が来ていた。

「本当？」

私の機嫌を直す為の嘘じゃないか、もう一度確認してみる。

「本当ですよ。夕方までずっとデートです。」

リュカの笑顔に嘘はなさそうだ。

「…行く。」

先程の自分の態度を考えれば、なんとなく気まずい。

そして自分の単純さが嫌だ。

「それではお姫様。機嫌は直してくれますか？」

俯いている私を引き寄せて、優しく頭を撫でながら髪をすく。

「うん。」

リュカも大人げなかった。けれど私の方が大人げない。

リュカはこうして私に気まずさからの逃げ道を作ってくれるくらい大人なもの、直さないわけにはいかない。

「じゃあ、おはようのキスはしてくれるよね？」

この世界では、家族や親しい人に頬かおでこにキスをする習慣があるらしい。

初めは慣れなかったが、フランスとかヨーロッパにこんな習慣があることを思い出すとどうってことなくなった。

それに起きた時と寝る時ぐらいしかしないし。

見上げると、リュカは紫の瞳をキラキラさせながら私のキスを待っている。

「おはよ…。リュカ。」

私は謝罪の意味も込めて、リュカの頬にキスをした。今日は妙に照れ臭くって、何だか頬が熱い。

「可愛い…」

「えっ？」

むぎゅっ

キスをするたびに、リュカに抱き締められた。私と同じ石鹸やシヤンプーの混ざった香りが包み、落ち着くような落ち着かない気分にさせる。

「おはよう。リック。」

蕩けるような笑顔のリュカが見つめる。

そしてリュカからのおはようのキスが、頬に落ちた。

さらに熱くなった頬が蕩けた。

第13話 爆走される

この世界には、1つの大陸に6つの王国しかない。

その大陸は、獅子が吠えているような頭の形をしている。

故に獅子の遠吠え響く世界とも呼ばれている。

その大陸のほぼ中央に位置するのが、ここペルノヴァ王国。

通称月と水に守られし偉大な国とも呼ばれるこの国は、6カ国最強にして最大の領土を持つ。

その名の由来となった月の恵みを受けし河が領土全域を囲むよう流れて、ここを緑豊かな地としている。

名もなき詩人によれば、水に浮かびし緑豊かなペルノヴァよ。ここに月の祝福満ち溢れん。永久とわに満月のごとき国であることよ。

つまり、神々に祝福されたこの国は、平和で永久に繁栄するだろうと詠われている。

そしてその王都ルティも水に浮かぶような都市で：昼は赤いタイル屋根の美しい街並み、夜はそのタイル屋根が青く変化しそれはそれは幻想的で…。

「…ある。」

「良くできました。リツカはすごいですね。」

リユカは、頭を撫でてくれる。

「へへへ。」

屋敷に引き込もっている時に、ペルノヴァとか王都ルティに関する本を隅から隅まで見てたんだもん！観光案内本は熟読派の私には当たり前のことだ！

「で、実際に見た様子はどうですか？」

「すごい！！素敵っ！」

対岸が見えない海のような巨大な湖のほとりに建設された王都は、本当に水に浮かぶよう。

目の前の湖岸の先には円形の壁に囲まれ、運河が張り巡らされた中心街が見える。赤いタイル屋根は、朱色に近く華やかな雰囲気だ。

中心部の右端から伸びる長い橋をずうっと目で追っていくと、遠く離れた湖畔に王城がそびえたつ。

いくつもの天を突き抜けるような高い尖塔が立ち並び、至るところに青々とした木々が植えられている。

歴代の王が数百年に渡り、段を重ねるように増築と補強を重ねたそれは要塞のようにも見える。しかし要塞のような物々しさはなく、水源である白き山脈を背に湖畔に佇む姿は、壮麗で優美だ。

そして、左手には何百年か前に増設された新地区に船着き場や湖に浮かぶ島も見える。

何でこんなに美しい王都の景色を堪能出来るかというと：魔法の絨毯のドノヴァンに乗って空を飛びながら都の中心に向かっているから。

そして知らなかった。

リュカの屋敷は、中心部に程近いこの湖に浮かぶ小島にあるのだ。その為対岸の中心街などへ移動する際には、船か絨毯を使う。

驚いたことに屋敷があるその島全てが、リュカのもの。どんだけ金持ちなんだろう。

まあ湖に島はいくつもあるから、島を所有する人は普通にいらしい。けれどリュカのお屋敷は島ってわからないほど広大な土地であり、豪華な屋敷だ。普通にお金持ちと考えると、間違いなさそうである。

それにしても対岸の中心街、前方に見える町も、下の湖に行く船も島も小さく見えるくらい高い場所を飛んでいる。

初めて空を飛んだけど、リュカが膝の上で抱っこしてくれてるし全然恐くない。

それにドノヴァンの運転は、揺れることもなく乗り心地も良いし。風が頬を撫でて気持ちいい。

今度は辺りを見回すと、空には様々な色や模様の絨毯に乗った人がいる。

「でも…。どの絨毯を見てもドノヴァンより素敵なのは、いないな。運転もすごく上手だし。ドノヴァンはすごいねっ♪」

ドノヴァンを人間に例えるとかなりの美形だ。

ラピスラズリのような青い糸を中心に、金などの糸で織られた幾何学模様が本当に高貴で美しい。

そして光沢のある質感は、日によって様々な表情を見せる。

朝日を浴びれば、爽やかな明るい表情。夕日を浴びれば憂いのある表情。

こんな絨毯、空を見る限りない！それにアシスタントの先輩としては、優しくて紳士的でデキル男！！背筋をピンと伸ばすように私た

ちを運ぶ姿…運転する姿は本当にカッコイイ!!!

ポワン

「煽りましたね、リツカ。」

「えっ? うつぎやあゝ!!!」

突然ドノヴァンが、スピードアップ。
むしろアクセル全開!?

「ドッ、ドノヴァン! スピード性能のアピールは入りません!!! 充分君の素晴らしさは、リツカに伝わってます!」

「おっ落ちるううう!!!」

強い風が当り、体が飛ばされそう! 絨毯から落下死とかあり得ないんだけど!

「リツカ。私にしっかり捕まって下さい!!! うぐっ…リツ、カ。そんなに巻き付かれては、私が…死に。」

「やだやだっ怖い! 死にたくないっ!!!」

後半のリユカの言葉は聞き取れなかった。

けれど、前半のお言葉に甘え、リユカの体に足を、首に手をぎゅゅと巻き付けた。

リユカにガッチリと抱きつきながら、ひたすらこの悪夢が終わることを願った。

結局なんでこんなことになったかはわからない。

ドノヴァンは、私達を中心部の広場に降ろしてやっと事の次第に気づいたようだ。

髪がライオンのようにバサバサで、疲れきった私。今思えば、ドノヴァンは絶叫マシーンだったな。

青ざめて死にそうな顔で、はあはあと息を切らすリユカ。こんな人遊園地にいるいる。私よりしんどそうだな。

ドノヴァンは大きな体を使い、一生懸命謝ってくる。あつ土下座まで…さすが日本通。

「帰りは船で帰ります。沙汰は追って下す。屋敷で待っている…ドノヴァン？」

ニコリ。

「ひいっ!？」

超絶美形の絶対零度の微笑。

目が全然笑ってない。言葉遣いも…いつもと違うし。

恐い!!

それを向けられたドノヴァンは、高速でここを後にした。まるで流れ星のようにキラリと空に消えていった。

沙汰とかって江戸所払い…じゃなくて屋敷追放?それとも切腹か打ち首か!?

日本好きのリユカならやりかねない。だって本棚にあるお江戸の罪とか言う本があったもん!!

これからのことを考えると恐すぎる!!

「私もう大丈夫だからっ!だからリユカ、ドノヴァンに絶対ひどいことしないで!」

リユカっお情けを下さいっ!!

「何を言っているのかな?あんなひどいことをされたのに、リツカ

はあの男の庇いだてでもするのかな？」

「あわわわわっ！！何でもないですうっ！」

火に油を注いだようだ。あの微笑を崩さず、身を屈めながら私のボサボサの髪を直しながらすく。

「そうですよね。それに私と言うものがありながら、そんなこと言わないですよね。」

恐すぎて、必死に頷くことしかできない。

ニコニコしてるけど、軽く脅されてる気がする。ごめんね、ドノヴァン。あなたの罪の減軽はできそうにないよ。

「では、時間も惜しいところです。さっそく、デートに行きましょう。」

「あい…」

はあゝ。疲れてまともな言葉が出てこない。

王都観光…。出だしからこんなで大丈夫かな？

私はリュカと手を繋いでることも気づかないまま、ぐったりとしながら広場を後にした。

そして私は知らなかった。

出掛ける前に、仕事がないからとデートについてこようとするドノヴァンと嫌がるリュカの間で一悶着あったことに。

リュカがその邪魔物が消えたと、ほくそ笑んでいることに。

第13話 爆走される（後書き）

その後屋敷に帰ったドノヴァンは…。

「ドノヴァンは何をやってらっしゃるのかしら。」

「パメラどうしたの？」

「エリカ様見てください。お茶に誘おうと思ったら、さつきからあの体勢のまま動かないんです。」

「ああ。座禅よ。きつとりツカ様のことで、お心乱されることがあったんだわ。そつとしときましよう。」

※王都のモチーフはフィレンツェ、ヴェネツィア、ドイツのネルトリンゲン。城のモチーフは、フランスのお城、シュノンソー城のディアーヌのアーチ橋、初期のゴシック建築、モン・サン・ミシエルなどです。

第14話 給仕される

ぼや〜としてたら、いつの間にかリュカに手を繋がれていた私。

「イヤー!! 1人で歩けるからっ!」

端から見たら、子どもが駄々捏ねているようにしか見えないだろう。でも精神年齢19歳な私は、知り合って間もない美形さんと何も考えずに手を繋ぐほど幼くない。大学の男友達と違って無理なのに。

「リツカは何でもイヤイヤですね。」

溜め息をつきながらも、その顔はにこやかで手を離そうとしないリュカ。

「だって…。」

誰かがいたら、一度でいいからリュカのような超絶美形さんと手を繋いでみて欲しい。

ありえないくらい、めっちゃドキドキするんだもん! こうしてる間も、ふにふにと私の小さな手の感触を確かめたり、指を絡ませたりして恋人繋ぎにするし。

それに、チラチラとこっちを見る人の視線が無視できないくらい痛くてしょうがないんだから。

周りを見ても、リュカ程美形な人はいない。そんなリュカを見て、女の人がそれはそれはキラキラとした目線を送ってくるのだ。

その中でも年頃の女の人の目線は、嫌な感じの目線がセットである。明らかに目線が下に向けられるから、私に目を向けられたってすぐにわかる。

何あの小さいの？何であんなのと一緒になのよ？と言いたいのがすごくわかる。

父としては若すぎて、兄弟や親戚としても似てないリュカと私が手を繋ぐ姿は目立つ。きつと不思議なものに違いない。

「こんな人が沢山いるところで、迷子になったらどうなります？大変なことになりますよ。」

「うっ…。」

それを言われては、何も言えない。

今歩いている通りは、オシャレなお店などが多いせいか若者で溢れているのだ。そこで迷子になった場合は、赤いタイル屋根で統一感があつて美しい建物が仇となるだろう。初めてここに来た私にとってはどれも同じようにしか見えないはずだから。

東京迷子の経験者としては、痛い言葉だ。

「それに、この目立つ姿で手を離したら拐われます。絶対にね。私だったら、見逃しません。」

「迷子になるのは、わかった。けど拐われるとかって大袈裟だよ。」

ひどく真剣な表情で言うけど、拐われるとかありえないよ。

ちなみにだ。私は魔法が込められたペンダントを身に付けているおかげで、黒い髪と瞳を濃い藍色にして一般的な月下の民と同じ容姿にしている。町には少ないながらも、月下の民らしき人がいるし目立つことはないと思う。

「自分の価値がわからないと言うのは、怖いですね。そこが擦れてなくて可愛い所なんですけど……」

「ん？ なぁにリュカ？」

リュカとはかなりの身長差があるから、ぼそぼそと小声で話されると聞こえないのだ。

「とにかくです。ここで子ども1人は危ないですから、私と一緒に必ずいること。リュカの場合はどこでも、1人じゃいけません。」

「はぁーい。」

最後は過保護だが、これ以上言うとしつこく言われそうなのでやめた。

賑やかな町並みに再び目を向けてみる。

人は様々な衣装を身に纏っている。浴衣ばいもの、ローマ、ギリシア風など、地球の民族衣装をこちらの世界流にさせた感じの服と言えればいいのかな。

それに女の人だけじゃなく、男の人も様々な装飾品を身に付けているのが地球と違う所かも。瞳と同じ色の紫のピアスと指輪をつけた、リユカはシンプルな方だ。

そして町を歩く月下の民は確かに黒に近い緑と藍色の髪と瞳を持つが、容姿は様々だ。肌は白い人から褐色、大陸の人よりは、小柄な人が多いけど背の高い人もいる。

顔を作るパーツは様々であれ、皆整っていることにビックリしてしまふ。確かに美形と言われるはずだ。

一体どんな進化をしたんだろ？うーん。ここの世界で生まれたから？かなり羨ましい。

「さあ着きましたよ。軽く何か食べましょう。」

そんなことを思っているうちに、大きな通りを外れて静かな場所に来ていた。そして、目の前にはカフェがある。

「かふえ、あまね。」

不思議なことに異世界の言葉も文字もわかる私は、ボードにある文字を読んだ。

人はいるが静かで、カラフルだけど落ち着いた色の石が嵌め込まれた壁が美しい。テラス席もあって開放感もあるが、隠れ家のおしゃれカフェという感じがする。初異世界カフェに、ウキウキとしながら店内へと足を踏み入れた。

案内されたのは、テラス席だった。

背が小さい私は、テーブルを使うときはお子様用の椅子を使わなきゃものが食べれない。しかし、このオシャレなお店にはあるはずもない。

そこでリュカの膝の上に座り、食べることになった。お子様椅子も未だ抵抗あるけど、膝抱っこのが恥ずかしい。仕方なく膝の上に座りながら、リュカが適当にオーダーをしたものが届くのを待った。

程なくして届けられたのは、ケーキとクッキーみたいなやつとミルクたっぷりの紅茶。

「はい、あ〜ん。」

クッキーみたいなやつを手に取り、私に食べさせようとするリュカ。

そんなことしないでいい！何でリュカはそんな嬉しそうなのよ！？

恥ずかしくて何も言えずに口をパクパクさせていると、口の中にお菓子が運ばれた。

そのお菓子と一緒に、色んな思いは溶けてしまった。

女の子は、お菓子を与えられるだけでご機嫌になる気がする。

私だけ？

もしそうなら、小さな時から1番上のお兄が、2番目のお兄と喧嘩して泣かされた時によくお菓子を作ってくれて慰めてくれたせいかもしれない。

「美味しいですか？」

「うん♪」

このクッキーみたいなやつがスゴく美味しい。丸い形のその周りには粉砂糖がまぶされていて、最初はサクツと最後は口の中で溶けてしまう不思議なお菓子。プレーンクッキーより甘いけど、すっきりと美味しく食べられる。

「はい。」

すっかりこのお菓子に夢中になった私は、リュカから差し出されるそれを食べる為に口を開ける。

私達の様子は、親鳥がせっせと雛に餌を与えてるようだろう。しかし私は鳥の雛のように器用に餌を受け取れなかった。

パクッ

「ふっ!？」

「あっ。」

間違ってお菓子を掴むリュカの指先を、少しだけ口に入れてしまった。

「うっあ…！ごめんなさいっ！」

半分食べたお菓子をよく味わいもせず飲み込み、リュカに謝った。

「大丈夫ですよ。それよりこっちは美味しかった？」

「んぐっ？」

こっち？違う味だったの？全く味なんかわからない！覚えていない！

「ん？美味しくなかった？」

パクッ

「リュッリュカッ…！」

やあー！！

なんで私の食べ欠けを食べるの！？

えっ！？

人差し指についた粉砂糖まで、ペロリと舐めとってるし。

その指、私がさっき口にくわえちゃったやつなんですけど。

「んゝこっちは甘過ぎなのかな。」

今度は親指をチュッと口に含み、目を細めながら私を見つめる。

わー！

そんな顔で見ないで欲しい！私の顔…絶対、絶対真っ赤っかだからっ！！

「リツカ…。」

突然ゾクツとするようないい声で、呼ばれる。

「あっ…。」

リユカの大きな手が私の頬に添えられ、みるみるうちに暗い影が私を覆った。

第15話 ナンパされる

唇の横をペロリと何かに舐められた。

「ひいー！」

目の前には、身を屈めて少し顔を傾けたリュカがいた。

「こっちはもつと甘いけど…好きだな。砂糖いっぱいついてたよ。」
クスツと笑うリュカ。その紫の瞳は、私を逃がすまいとまっすぐ見つめ、頬を指で撫でている。

「あわわわ…!!！」

顔が熱い！湯気が出そう！

リュカは仮にも子どもの私に何てことをしたのっ！…しかも、こっ公衆の面前でだよっ！だっ誰も見てないよねっ！？

キョロキョロとするが、誰も見てないようだった。ふう〜とりあえず良かった。

「心配しなくても大丈夫ですよ？」

こっちを見てと言うように、顎に手をかけられる。

「リツカの無防備で真っ赤な可愛い顔を、誰かに見せるなんてへまはしませんから」

「!?!」

また、影が落ちてくる。

今度こそ来るであろう衝撃に備えるように、ギュッと目を閉じた。

突然、体に小刻みな振動が伝わる。

ぷっ

「はははははっ!! そんな堅くなっちゃって。」

「なっ!?!」

目を開けると、迫ってくるはずのリュカの顔はなかった。

「そんな顔をされたらね。いくら私でも手は出せませんよ。いつもリツカは、嫌がりますしね? ククッ…。」

私の唇をチョンチョンとつつくりユカ。

コイツ…私が嫌がるのをわかってて引っかけた!?!

「むー!!! リュカー!!!」

振動は、全然止まる気配をみせない。

「ああ。怒って頬を膨らましてでも可愛らしいんですね。」

プチン

久々に自分の中で、何かがキレる音がした。

「意地悪リュカなんて、もう知らないもんっ!!!」

からかうにも程がある!

何さ、余裕で笑っちゃって。私はいっぱいいいっぱいなのに。

「あっリツカ!」

呼び止めても、もう遅いんだから。

リュカの膝の上からスルリと降りて、ろくに前も見ずに道を歩いてすぐだ。

ゴツン

「ったあ！」

痛い：前を見ずに歩いていたら、おでこを電柱にぶつけて尻餅をついてしまった。

いや電柱はこの世界にはない。

じゃあ別のものだ。おでこを押さえながら、起き上がろうとした時だ。

「おお、悪いなあ。大丈夫か？」

頭上から男の低い声がして、脇に手を差し込まれてやや乱暴に引き上げられた。

「きゃっ！！！」

一気にかなりの高さまで上げられて止まった先には、なかなかイケメンな顔があった。

赤茶色の短めの髪に薄茶色の瞳。無精髭があるけど、そこが男らしくワイルドな感じ。体格も良い。

「なっ。これは…。お兄さんと遊ばないか？」

「:!!?」

くしゃっと笑うお兄さん。

ナ、ナンパですか？

何も言うことが出来ず、手足をぷらんぷらんさせながらイケメンさんを見つめていた時だ。

「リックカ!!」

リュカの大きな声が聞こえた。振り向くと、心なしか焦ったような顔が迫ってきていた。

「おっ！丁度いい。」

「?」

イケメンさんの声に、また前を向く。
丁度いい？

「リックカ!!」

リュカが声を上げるのと同時に、私はイケメンさんの腕にお尻を乗

せられ抱きかかえられる体勢に変わる。

「やっ！」

「おっーと！何乱暴に掴みかかろうとするんだよ。嬢ちゃんがビツクリするだろう？なあ？」

掴みかかる？イケメンさんが急に抱きかかえるから、ビツクリしたんだけどな。

「いいからその子を返せ。ヴァレリー。」

あれっ？リュカってこんな素っ気ない話し方するの？

「ふーん。親友にその言い方は、ないんじゃないかなあ？お嬢ちゃんにはリュカと知り合いみたいだな。」

どうやら知り合いみたい。ヴァレリーさんもリュカも、お互い碎けた話し方をしているし。

「誰が親友だ！私はその子の保護者だ！」

「私、こんなおじさん知らないもん。」

ほぼ同時に重なるリュカと私の声。

「なっ!？」

リュカは絶句している。

さっきの仕返しだもん。さすがにリュカはおじさんじゃないけど、これくらい言わなきゃ気がすまない。

リュカに見せつけるように、ヴァレリーさんの首に手を回しギュッと身を寄せた。

「ぶっ!! おじさんとか!! お前が女にそんなんされてるとこ初めてみたわ。そうか、そうか。」

「笑ってないで、早く返せ。言っておくが同い年のおまえもおじさんだからな。リックも、こんな野蛮な奴から剥がれなさい。」

頬を引きつらせ笑うリュカ。

「やだ。リュカが悪いんだもん! それにこの人は、リュカみたいに野蛮なおじさんじゃない!!」

謝らない限り、ヴァレリーさんから離れないんだから。

「だよなー。つーかよっぱど嬢ちゃんの機嫌を損ねたみたいだな。リュカに何された? ん?」

「あの…その…。」

恥ずかしくて言えません。思い出すだけで、顔が熱くなる。

きゅうつと下を向き俯いていると、ヴァレリーさんが頭を撫でてくれた。

「ああ、ごめんな。そうか言いにくいよな。コイツこんな顔して、変態だしえげつないことするもんなあ。」

やっぱリュカってそうなんだ。

薄々感じてたけどさ。

じとおくとリュカを冷めた目で見つめた。

「子どもの前でそんな嘘を言うな。教育に悪い。第一おまえに言われたくはない。おい、無視するな。」

「なあなあ。リュカみたいな奴より、俺と一緒にいた方が絶対いい。俺んち、来ないか？」

「えっ!？」

「ヴァレリー!!」

ヴァレリーさんって軽い？

人懐っこそうな笑みを浮かべながら、薄茶色の瞳をこっちに向けてるヴァレリーさん。その笑顔からは、何を考えてるのか伺い知ることとはできない。

その心の中を覗きたくて、じいーつとその瞳の奥を覗きこんだ。

「嬢ちゃんは賢いな。」

笑みを深めたヴァレリーさんは、私の耳元で囁いた。

「俺もな、仕事でリュカに苛められてんだ。だからちょっと仕返ししたくてなあ。」

再び私の顔を見つめて、ニッと笑うヴァレリーさん。

この時、リュカに苛められている同志として共鳴したのは言うまでもない。

第16話 反撃する（前書き）

後半は、リュカ視点です。

第16話 反撃する

「いい加減離れなさいリツカ。ん？」

こしょこしょとヴァレリーさんと話をしていると、リュカから冷気の籠った視線を向けられた。

「リュカがちゃんとヴァレリーさんとここで話して、お仕事しなきゃ離れないもん。」

「ヴァレリー！！貴様っ！私のリツカを使って…！」

眉間に皺を寄せるリュカ。

何のお仕事か知らないが、リュカが仕事をしなくてヴァレリーさんはかなり困っているらしい。それなら協力するよと話していたのだ。

「どうするリュカ？嬢ちゃんを俺んちに連れて行くぞ？」

私が頼めば、リュカは引き受けるってヴァレリーさんは言ってたけど本当かな。リュカは、渋ってる感じだし…。

「んゝ。もう一押しだな。」

「？」

何か言った？首を傾げてヴァレリーさんを見つめた。

チュッ

「!？」

ヴァレリーさんが可愛い言いながら、私のおでこにキスをした。

ひえええ!! なんてことを!!!

突然のことに、口をパクパクさせていると…。

「クソッ!! わかった。話も聞くし、仕事はやるから、早くリツカを返すんだ!」

本当だ。リュカが渋々とだけど引き受けた。

「やりいゝ!」

「ふぎゃっ!! っ痛い! 痛いよ! やだあ!」

ヴァレリーさんが嬉しさのあまり私に頬擦りをする。でも無精髭のだらけの頬は、子どもの柔肌には凶器だ。

これでもかってくらいジヨリジヨリするもんだから堪ったもんじゃない。ペチペチとヴァレリーさんの体を叩くが、びくともしない。

「リツカ！」

そんな風に抵抗していると、べりつとヴァレリーさんから引き剥がされてリュカの腕の中にいた。

「あゝあ。お姫様が悪い王子様に拐われちゃったよ。」

残念そうに言っているが、目的は達成されたようで満足げだ。

「…。先に拐ったのはお前だからな。さっリツカ拭いてあげますね。」

ヴァレリーさんから私を隠すようにして背を向けて、くしくしと私のおでこを服の袖で拭い始めるリュカ。

なんでだろう？

「うわあゝ俺のキスは汚れ扱いかよ。」

「ふんっ。当たり前だろう。気安く私のリツカに触るな。」

リュカ…なんてことを。

「ねえリュカもういいからっ。早くヴァレリーさんとお仕事のお話して？」

おでこを拭くリュカの手を押し退ける。

「話すことはありません。今日は貴女とデートに来ているんですよ？仕事なんて野暮なことしません。」

それでは約束破りだ。しかもヴァレリーさんが困っちゃう。

効くかどうかかわからないが、ヴァレリーさんに教わったことをやってみるしかない。

ヴァレリーさんから聞いた、リュカにお願いをする時のポイントは3つあるらしい。

まずは、上目遣い。これは身長差で楽々クリア。

次に、少し困ったような甘えたような顔と声。演技は苦手だけど、なんとか大丈夫。

最後は、涙。これが難関。

演技派子役ちゃんの涙のシーンを見ていつもすごいなあって思ったら、お母さんがいなくなった時を思い出しながらやってるらしい。

今回私は、2番目のお兄にプロレス技を掛けられた時を思い出してチャレンジ。あれ、本当に痛すぎて大号泣したもん。今までの人生の中であんなに泣いたことも、痛い思いもしたことない。

以上3つは、誰にでもできそうだがリュカにはなかなか効かないらしい。

でも私なら大丈夫だとヴァレリーさんがかなり推すのだ。今がそれを使うときじゃないかと思った私は、試しにやってみようと思ったわけだ。

「ねえリュカ。そのカフェでお利口さんにして待ってるから。ヴァレリーさんとお話して？」

涙は出ないが、自然と目が潤んできた気がする。よしっ！そのままリュカを見つめ、もう一押しする。

「ねえリュカ…お願い？」

「うっ！リツカ…。はあ、わかりました。」

溜め息をつきながら、眉尻を下げるリュカ。

なんだか顔が赤いけど大丈夫かな？さっきヴァレリーさんと苛立たせ過ぎちゃったからかな。

ともかくだ。作戦は成功した。

「リュカッ！」

ギュッとリュカの首に手を回して、喜びを表すように抱きついた。

リユカに見えないように、ヴァレリーさんにピースサインを送る。

ヴァレリーさんは目を細めてクツクツと肩を震わせ、込み上げる笑いに耐えているようだ。そして、もう片方の手でピースサインを返してくれた。

「どう言うつもりだ。ヴァレリー。」

リツカをカフェテラスに残し、少し離れた所で話をする。視線は、リツカが必ず入るようにしている。

「お前が全然本邸の庭に顔出さねーから屋敷に出向けば、出掛けたって言うしよ。探したんだぜ？」

「ささっと用件を言ってくれ。急ぎなんだろう？」

リツカを待たせたくないし、コイツが私を探したということはそう言うことだろう。

「これだ。何も言わず受け取れよ。」

革袋から取り出されたのは、何の変哲もない金貨1枚…じゃない。

これは…。

「取り合えず、目立つからしまってください。」

手に触れる金貨の感触、重さを確かめるようにしてポケットにそれを納めた。

僅かだが、光具合、重さが違う。偽金だ。それもかなり精巧な…。

「…。夜に《本邸の庭》で会おう。話はそこで聞く。」

「わかった。」

「ヴァレリー、そっちは帰る道じゃないだろ。」

なぜかカフェへと足を向けている。

「ん…？紳士らしく嬢ちゃんに別れの挨拶をと思っとな。」

「そんなことをしなくていい。もうリツカに近づくな。」

さっきから大事な俺の物にベタベタ触って、手垢どころかキスまでした奴を近付けたくない。

「でもさ、見ろよ。嬢ちゃん俺に気づいて走ってきてるしな？そん

な顔をすんな。嬢ちゃんがビクリするだろ。」

リツカに手を振りながら笑うヴァレリーを苦々しく思いながら、笑みを作った。

後で覚えてろよ？

「ヴァレリーもう帰っちゃうの？」

自己紹介を済ませた2人は、さっきより親しげに言葉を交わしている気がする。

さっきなんてこうだ。

『ヴァレリーって呼び捨てでいいの？』

『勿論。俺たち同志だろ？』

『うん♪』

同志と言う言葉に、ぱあっと可愛らしい笑みを咲かせるリツカ。

同志って何なんだ！？きつと悪魔に何か唆されたに違いない。リツカは素直だからな、奴の仮面にきつと騙されているに違いない。

さっつきからこんなやり取りを聞かされて正直我慢の限界だ。

小さいリツカに合わせて屈み込むヴァレリーの様子を見るだけで、本当に苛立たしい。

「誰かさんのせいで仕事如山積みでなあ」

チラリと私の顔を見るヴァレリー。リツカの前では言わないが、その仕事の半分は絶対遊んでるコイツのせいだ。

「じゃあ今度時間があったら、家に遊びに来てね！」

「リツカそんな奴…。」

「ねえ…リユカいいでしょ？」

こんな虫みたいな奴を近付けたくないのに、リツカにこんな風にお願ひされては断れない。

「はあ…わかりました。」

「わあゝいい！じゃあまたね、ヴァレリー！」

チュッ

「リツカ！何てことを！！」

「!!!」

あろうことかりっかが、ヴァレリーの頬にキスをした。

突然のことにヴァレリーも頬を赤らめて、咄然としている。

「え〜？ 親しい人にはこうやって挨拶するんでしょ？」

まさか自分の仕組んだことが仇になるとは思わなかった。

リッカがあまりにも私とのキスを洩るものだから、親しい人にはキスをして挨拶をする慣習があると嘘を教えていたのだ。

「お〜そうだ、そうだ！ じゃあ俺も♪」

「ヴァレリー!!」

そんな慣習はないってわかってるくせに、ヴァレリーはリッカにキスをしようとする。

リッカから奴を引き剥がしたいが、間に合わないっ！

「やだー。だってヴァレリーの髭がチクチクするんだもん。」

リッカが寸での所で、ヴァレリーを押し退けた。

「おうそうだな。次は剃ってくるからこの次な。にしても、リュカはしっかりと嬢ちゃんの教育してんのなあ。」

「ヴァレリー…。」

ヴァレリーはニヤリと含んだ言い方をしながら笑うと、俺の怒りから逃げるように去っていった。

本当に後で覚えていろよ…。

脳内には、奴にすべき制裁案が次々と浮かんだ。

第16話 反撃する（後書き）

悪魔なヴァレリーに唆されて、小悪魔リツカになりました（笑）
反撃されたリユカは、ヴァレリーにどんな制裁を加えるのかは、後々書きます。勿論リツカも！？

第17話 飛来する（前書き）

3話連続投稿1話目です。

第17話 飛来する

ヴァレリーと別れた後は、屋敷の皆にお土産のお菓子を買いにリュカお薦めのお菓子やさんに行った。そこでのリュカのモテっぷりはすぐくて、売り子のお姉さんは目がハートだった。そのお陰でお菓子をおまけして貰えたけど。

そして、現在。

私たちは小舟に揺られ、リュカのガイドを聞きながら運河から見る王都の景観を楽しんでいる。

「すごいね!!」

王都を縦横に走る運河から見る王都中心部は、空から見るとまた違って素敵だ。

特に橋なんかも古きよきもの、新しき色鮮やかなもの、奇抜なものまであるし、橋の下をくぐるときに見えるモザイク画などを見てはビックリしている。

リュカの話だと、王都の運河は中心部の真ん中の円形の広場へ向かって延びる4つの運河を中心としながら、都中に張り巡らされている。4つの大通りと共に都の交通網として重要な役割を果たしているのだそうだ。

運河を行く舟は、地球で言うところのタクシー、公共や商業バスと言ったところだろう。

「この橋の絵は、花の女神が歌う様子。春の本格的な訪れを表しています。」

リュカは、優秀なガイドさんで私が質問するたびに丁寧にわかりやすく教えてくれる。

「なるほど！それに運河って水がキレイだね。」

山から流れる清流のように澄みきっていてキレイ。舟から身を乗り出して、水の感触を確かめようとするが…。

「危ないですから、ちゃんと私の膝にいてください。」

あえなくリュカの手によって阻まれた。

「平気だもん、落ちたりしない。リュカは過保護だよ。」

今のリュカって、チャイルドシートみたい。体がシートで、腕がベルト。子どもが危ないことしそうになったら、自動ロックしたり。そこまで、子どもじゃないんだけどなあ。

「そうだよ。ちゃんと旦那の膝の上にいなきゃ、小さい嬢ちゃん
は危ねえよ。」

好奇心旺盛で、旦那は目が離せねえなあと言いながら、ケラケラと笑う船頭さん。

船頭さんからの客観的意見がそうなら、大人しくチャイルドシートに座っているしかない。

今一精神年齢と見た目年齢のギャップが埋めきれないんだよね。

「ほら、リツカ。船頭が持っているかい櫂があるでしょ？あれで、運河の水を浄化しているんですよ。」

「ええ！？どうやって？」

ビックリだ。どんな仕組みだろう？

「あの櫂は浄化作用のある特別な木で出来ているんですよ。ちなみに船頭は、風の力と水の力を込めてこの櫂を漕ぎますから、その効果を高めて使っています。」

そして運河に堆積した泥を年に4回掻き出して清掃し、それは王都の周りにある畑の肥料にしてるそうだ。なんだかエコだ。

「船頭さん魔法が使えるの？」

そして、魔法なんか使ってる素振りを見せていない船頭さんにもビックリだ。

「ははは。当たり前だ、じゃなきゃ生活できねえ。ほれっ。」

船頭さんが、櫂から片手を離して指を指す。すると水しぶきが起きて、小さな手のひらサイズの虹を出した。

「すごい！」

ぱちぱちとこれでもかと言うぐらい拍手を送ると、船頭さんはこれくらい朝飯前だと少し照れていた。

「魔法は目に見えないところで使われてることが多いですよ。」

リュカが補足で説明してくれる。

「そうなんだ。私も魔法使えるようになる？」

「なりますよ。今度教えますね。」

私の頭を撫でながら、にこやかに答えるリュカ。

「わーい！ 楽しみ♪」

せっかく第2の人生を異世界で送っているのだ。魔法を是非とも使ってみたい。

「おうちようどいい時間だ。お嬢ちゃん。空を見上げてごらん。」

船頭さんが、懐中時計を出し時間を確認する。

なんだろう？ と思いながら空を見上げるが、青くてキレイな空が広がるばかり…。

バサバサッ

「なっ何あれ!？」

カラフルな手紙の大群が空を横切る。しかも手紙には、羽が生えて
いる…。

「手紙鳥の群れですね。」

「手紙鳥？」

手紙鳥。手紙に特殊な呪文を唱えると、そのものが鳥のように飛んで届け先に行くらしい。伝書鳩みたいなもので、この世界の連絡手段らしい。

「この時間は手紙を出す人が多いから、群れが見えるんだよ。」

船頭さんは、パチリと懐中時計を閉じる。

「あれ。こっちに来るよ。」

その群れの一団からひらりと一羽の手紙鳥がこちらへ向かってきた。

その白い手紙鳥は、ひらりと舞い降り礼を取った。

「手紙鳥は、書いた人の筆跡、内容をなどを読み取り人柄も表すんですよ。これは、オーギュストですね。」

オーギュストは屋敷を取り仕切る優しいおじさま的な執事である。

リュカは手紙鳥を手にし、封を開ける。すると手紙鳥の羽と足は消え、普通の手紙へと姿を変えた。

最初は普通に手紙を読んでいたが、徐々に表情を真剣なものへと変えた。

「悪いが、このまま広場に向かってくれ。料金は上乘せするから、急いでくれ。」

広場は、王都の中心地だ。円形の広場は、神殿を真ん中に配置し、都の取り仕切る政庁、図書館、舟のターミナルがあるところでもある。

「どうしたのリュカ？」

「私に神託が下ったそうです。広場の神殿で神官が私を待っている。」

「神託…。」

神託が何かはわからないが、リュカの強張った表情、深刻そうな雰囲気を見ると聞けない。何かまずいことなのかも知れない。

この件で、勿論王都観光は中止だ。広場に付くと待っていたトッドとエリカに私を預けて、リュカは広場の神殿へと行ってしまった。

「ねえねえ、エリカ。」

私はトッドが漕ぐ舟に乗り換え、家路につく。

「どうしました？」

「神託って何？」

リュカに聞けなかったことを、横に座るエリカに思いきって尋ねてみた。

エリカは、どこから説明しようかと呟きながら優しい口調で語り始めた。

リュカの表情とは、全然違う表情。それがひどくに気になった。

第18話 神託sideリユカ（前書き）

3話連続投稿2話目

第18話 神託sideリユカ

神殿。

多神教であるこの世界の幾千の神々を祀り、人々が祈りを捧げる礼拝所がある。

神殿には奥の間と呼ばれる光が降り注ぐ不思議な部屋があり、そこには異世界：地球の日本のものが流れ着く。私はここにちよくちよく出入りをして、日本のものを買い取っている。

ここ王都ルティには、2つの神殿がある。

この巨大な湖の真ん中に浮かぶ、大神殿。

王都中心部の広場にある、小神殿。

なぜ同じ神殿を大と小に区別するのか。

大神殿は王国に点在する神殿の総本山であるから。国の平和を祈り、王国内の各地の神殿を束ね、国の神事を司るところである場所なのだ。

小神殿はどちらかと言うと古くからこの地にあり、都を守る月の神と水の神の2柱を中心に祀ってあるので、大と小で区別しているの

だ。

それだけではない。

まず大神殿は、王国で唯一神託が受けられる場所。神託の巫女が在籍する場所。

広場の神殿から大神殿へと向かった。あまり知られていないが、小神殿の奥の間から大神殿の奥の間へと移動ができるのだ。

「お待ちしておりました。リュカ様。」

そこには、この国唯一の神託の巫女いた。薄い紫色の髪をまとめ上げ、水色の瞳を持つ若干19歳の巫女は、いつもと変わらず凜として落ち着いた様子である。

「神託が下されたと、聞きました。」

神託とは、神の言葉。

巫女が奥の間で祈りを捧げている時に、神から巫女に下される。その神託は巫女の口により、神託を下されし者へと伝えられるのだ。

私は神託が下されと聞いた時、直感だがリツカのことかも知れないと思った。タイミング的にもそれしかありえないのだから。

「はい。では、伝えます。」

光が降り注ぐ間で、俺は一応礼儀として手を組んで巫女の言葉を待った。神託を拒否することは許されないのだ。

「貴方の元にいる黒髪の乙女。その乙女は鍵です。」

「リツカが？ 鍵？」

昔から神託とは曖昧なものである。

それだけでは、リツカが存在が何を意味するのか全く検討がつかない。

「神々はこう仰せです。乙女を守るために、名を封じて貴方に預けたのだと。神託は以上になります。」

「守るため！？ 名を封じることが、危険なことは神々は知らないのですか！？」

この世界に來たばかりのリツカが、一時危険な状態に陥ったことを思い出すと怒りが込み上げてくる。

「巫女を責めるのは、お止め下さい。」

扉から表れたのは、ショートヘアーが特徴的な見るからに聡明な女性。

「大神官長…。」

50代後半とは思えない美しく気品ある姿は、長年神事に携わってきたからだろうか。

「お久しぶりです。…リュカ様？」

「挨拶はいい。急ぎ話したいことがあるのだろうか？」

大神官長とあろうものが、神託を受けている最中にこのような無粋な真似はしないはずだからな。

「実は数週間前、この奥の間が歪む事件が起きました。貴女の元にいる乙女は、それが原因でこちらの世界に引きずり込まれたかと。」

数週間前…。確かにリツカがこちらに来た日付と合う。

「歪むと言うことは、何らかの強い神々の力に反する魔力を使ったものがいると言うことですか？」

この世界の魔法は、神々の恩恵により与えられたものである。それに反する力とは、即ち、強い負の力。

「はい。神々はこの強い負の力から乙女を守られたのかと私は推測しています。」

「…。」

確かにそれなら、納得出来なくもない。名を封じれば魔力を身の内

に取り込みにくくなり、魔力の干渉を受けにくくなる。

「それに神に愛された貴方の元へ託されたのです。きっと意味あることです。今こそ本来の貴方を表し、その強大な力と知性を使うべき時なのでは…。」

「過ぎた推測ですよ、大神官長。それに私は控えめに生きていくつもりです。」

大神官長の言葉を遮った。

神に愛されたと言われるのは好きではない。神に愛された自分は捨てたも同然なのだから。

それを聞くと、あの苦い思いが甦ってきそうだ。愛されているのなら、なぜ私から奪ったのかと…。

「…。出すぎた真似をお許し下さい。」

「それより歪みの件はどこまで伝わっているのかな？」

「両陛下、並びに各王子殿下、捜査に当たっている神官数名です。現在原因を調査中であります。」

「そうか。何かわかったら、私にも報告を頼む。」

リツカの出現、偽金、神託、負の力。

私の周りで色々なことがおき始めているが、手掛かりがない今はわかることから調べていくしかない。

私は、大神殿を後にした。

第19話 本邸の庭sideヴァレリー&リュカ（前書き）

3話連続投稿最後です。前半がヴァレリー、後半がリュカ視点になります。

第19話 本邸の庭sideヴァレリー&リュカ

《本邸の庭》

これは隠語で、貴族の屋敷の庭を指すものではない。

これは王都特別警備隊の本部のこと。

王都に限らず様々な事件の捜査と取締を任されている国王陛下直属の特殊部隊。表に立つことなく、裏で暗躍し事件を解決し、その部隊規模は不明と怖れられている部隊。

この部隊の捜査官である俺に言わせてみれば、こうだ。

捜査官連中はこれを副業でしてるから、本業に差し障りのないよう密かに行動している。結果捜査官は顔が割れないよう、検挙をする時に面を被るようになった。その為謎の部隊となっている。

部隊規模が謎なのは、様々な職種につく捜査官の情報網を使って調べたりするから、知らず知らず捜査官のようになってるやつがいるから。

ちなみに《本邸の庭》の意味を詳しく言うと、本邸が王が住まう王

宮、その庭が部隊。つまり、暗に王直属の部隊と言うことを元は指している。

そしてこの庭で飼われてる狼、狼を面を持つ捜査官がヴァレリー・ギヌメール：俺だ。本業は、他国からの輸入業を生業としている下級貴族。

んで横にいる見目麗しい美貌の猫ちゃん。いや猫被った猛獣が皮肉にもワンコな俺の飼い主。

豹の面を持つ悪友のリユカ・ブルームだ。表向きは平の捜査官を気取ってるが、謎の中の謎と呼ばれる部隊の長官であったりする。

「これが、前回の不正取引の検挙で押収されたと。」

現在第2保管庫で、押収された偽金を鑑定してもらっている。

「そ。でもそいつら支払われた金に偽金を使われてるなんて知らねーみたいなんだよな。んでパッと見て偽金はどれくらいあるよ？」

「金・銀・銅貨の約120枚中金貨5枚、銀貨30枚だな。詳しく調べて、判別する魔法を考える。出所はもうわかっているか？」

「それがなーんも。やつらには、世界中に客がいたもんでね。」

リュカは金貨5枚、銀貨5枚を懐にしまうと、引き続き調査を続けてくれと言った。

「しかし、この検挙お前がいなくて大変だったんよなあ。」

リュカはそのまま帰りそうだったので、聞きたいこともあるから愚痴を溢してみた。

「ふん。私がいなくても組織として機能してもらわねば困る。」

睨み付けてくるリュカだが、そんな長年付き合っている俺はなんともない。

「ヴァレリー、何が言いたい？」

その言葉待ってたよ、リュカ。

「リュカが検挙や本部に2週間も顔出さなかったのは、あのお嬢ちゃんのせいだったんだなあ。あれ月下の民のどこの子だ？保護委員の関係か？」

長官様が仕事ほっぱいて、溺愛している嬢ちゃんが気になってしょうがなかったのだ。

初めて嬢ちゃんを見たときは、俺はあまりの可愛さにビックリした。あんな可愛い子見たことなかった。しかも性格は賢く可愛い。子ども相手にドキドキしまくったし。もうちょい大きければ、俺好みなんだけどなあ。

それにリュカもそんな感じだし？子どもだが女にベタベタなリュカなんて初めて見たからな。

「お前には関係ない。」

説明するのが面倒で、心底嫌そうにするリュカ。

「まさか…お前本当に拐って来たのか？」

まあ少数民族である月下の民の保護委員の関係で預かってるんだろうとは思ったが、詳しく知りたいので少し話を長引かせる。

「馬鹿なことを言うな。俺のコレクションとして保護してるだけだ。」

は…？今とんでもない言葉が聞こえたぞ…。

「なっ何だそれ！？前から変人だと思ってたけど…マジかよ。しかも月下の民の保護委員としては最低だろ。やっぱ引き渡さなきゃ良かったな。」

予想外の言葉に焦る。このままだと変態に監禁されて嬢ちゃんは危険だ。こいつの美術品収集への情熱は半端ない。気に入ったものは、一生手放さない奴だからな！

「お前の思ってるような卑猥なことはしてないぞ。愛でたりしてるだけだ。それに念入りに手入れだってしている。今のところ順調に育てているし。」

「お前の感覚でそれ言われても解釈するには、広すぎて恐っ。確かに今んとこ素直に育ってるみたいだが、これから思うと：嬢ちゃんの未来が心配だ。」

何だか微妙な言葉が色々出てきた。しかし変人つか天才の考えは、普通感覚の俺にはさっぱりわからない。話したときの嬢ちゃんは頭も良く普通に素直に育っていた。だが、将来が不安なことに変わらない。

「お前に心配される筋合いはない。それにリツカの身に関しては、神殿から神託を受けている。」

一通りリツカと出会った経緯と神殿でのことや神託のことをヴァレリーに説明した。

「しかし、鍵なんて曖昧なんていいとこだな。事件の他にも謎とか鍵なんて色々あるだろ。」

「ヴァレリー。前向きな言葉を掛けてるつもりでしょうが、事件も謎も不穏な要素を持っています。」

なんて馬鹿な奴だ。でもそんな馬鹿でプラス思考な所は、私の救いになってきた。

「ああやべつ。でもな、神さんが長官であるお前に嬢ちゃんを託したってことは、護衛ってことかもな。」

「もしそうなら…そうでなくても私は全力でリツカを守ります。」

何が私をリツカに執着させるのかはわからない。けれど、もう手放せない大事な愛しい存在なのだ。

「つーことは、嬢ちゃんはずっとこっちにいるってことだよな。」
ふーん。」

ふふんと笑いながら俺を見遣るヴァレリー。

この笑い…嫌な予感がする。

ヴァレリーは、俺を変人だと言うがコイツもコイツだ。幼い頃から悪友として付き合ってきたからわかる。

この人懐っこい笑いは、悪魔の笑み。あの笑みを浮かべて、どれだけの悪事を仕出かしてきたか。だから今の職にあるんだがな。

「何を考えてる？」

「うん？ やっぱさつき拐つとけば良かったなあって。お前の言葉を借りれば、一番のお気に入りの女になっちゃったんだよな。」

「!？」

「いや、あんな可愛い子にじいっと見つめられちゃってキスされて、オジサンイチコロなのよ。成人するまでの間、じっくり落とそうかなって♪」

「ヴァレリー？」

私のリツカをどうするつもりだって？ん？わなわなと胸が静かに震える。

「ああ将来が楽しみだな♪きつととびきりのいい女になる。俺馬鹿だし、賢い嬢ちゃんなら嫁にピッタリだ。なあ俺の為に大事に育ててくれよ？」

制裁案はアレに決定だ。

「リユカお帰りなさい！ふぎゃっ！！」

屋敷に帰って、直ぐ様リツカを抱き締めた。

「誰にも渡しません。嫁にも行かせません。」

「はぁ？リュカ何言ってるの？神殿の神託で何か言われたの？」

大丈夫かとペチペチと私の頬を叩くリツカ。その紅葉のような手を取ると、柔らかく温かいなんとも言えない感触。いつも猫の肉球のようニフニフにしてしまうのが私の最近の習慣だ。

「私は君の護衛らしいですよ。」

たぶん神々が私にリツカを預けたのは、ヴァレリーのような野蛮な奴や虫から遠ざける意味もあるに違いない。

神託とは曖昧なものだからな。その意味を含めてもいいだろう。

第19話 本邸の庭sideヴァレリー&リュカ（後書き）

その後のヴァレリーに下された制裁は？

「げっ！なんだこれっ。」

本邸の庭で、勤務日程を確認しに行ったときだ。

前半1週間が、国境に調査出張？後半1週間が全部本部内勤の夜勤？

嬢ちゃんに会えねえし、全然女と遊べねえ！！

「この勤務日程考えたの誰だ？あ？」

本部の事務員に聞く。

「ひっ！僕に八つ当たりしないで下さい。長官の命令なんですから。」

リュカの野郎。でも俺はこんな障害なんかに負けねえぞ。

その後のドノヴァンに下された沙汰は？

「きゃあ！！ドノヴァン水浸し！縮んじやう！生地か痛むよーリュカっ！」

ドノヴァンが、噴水で水を浴びている姿をリツカ見て悲鳴をあげて

いる。

「大丈夫ですよ、ドノヴァンは魔法の絨毯ですから。」

「でも…。」

「あれはドノヴァンに下した沙汰です。リツカ、彼の償う姿を見届けなさい。」

ドノヴァンに下された沙汰は、滝行による精神統一。噴水の水に、ドノヴァンは身が縮む思いをしているに違いない。だが、リツカも私もあの時その思いを体験したんだ。そのことも身を持って知りなさい。

第20話 告白される

「しちがつみつか…。」

異世界言語は、なぜかすらすら話せるし読める私。でも字だけはちよつと不得意なので、辞書を使いながら練習がてら毎日日記をつけている。

不思議なことに、こちらの世界は日本と同じ太陽暦が使われているのだ。それに私がここに飛ばされた日と、異世界での日付は一致しているのも不思議だ。まあ楽だけどさ。

「きょーも、としょしつではんをよむ…つと。」

リュカの屋敷に来て、20日くらいだろうか。

居候の身で、申し訳ないが暇である。

確かにご主人様のリュカに愛でられるたり？お相手を務めたり、アシスタントの仕事なんかあるけど、リュカはここ3日仕事忙しいみたいで夕食の時間まで帰ってこないからやることないし。ドノヴァンもリュカについていってるからいないし。

することがないときは、この図書室で本を読むことにしている。早く異世界に慣れたいし、本も好きだし。でもやっぱりずつとは無理だ。

「暇だな。」

さっそく読書に飽きてしまっているし。

机の横の窓からは、風が吹く。7月になり季節は夏だけど、湖に浮かぶ島のせいか涼しく快適である。

「外出たいなあ。」

再び目線を日記帳に戻し、えんぴつでどこでもいい落書きをする。

考えてみれば、おととい王都に行っただけでほぼ引きこもり生活だ。

子どもってこんな引きこもって暇なわけないよね。

この年ぐらいの私って何してたっけ？

「じゃあ、一緒に外で遊ばない？」

「えっ？」

窓から男の人の声が聞こえた。

な、なんで？

恐る恐る窓を見ると…。

「なっ生首いい！！！」

にこにこ笑う生首が窓にあった。

だらだらと冷や汗が背中を伝う。

カタカタと体が震える。

心霊とかホラーは、小さい頃から本当に無理なの！

「えっ！？リツカちゃん？」

「うやあー！！話しかけないでえ！恐い！！！」

顔を背けながら物を投げつけて、成仏してくださいとか念仏を唱える。

恐すぎるから、とにかく私の前から消えて欲しい！

「浮いてるだけだよ！ほら、よく見て？」

「グスッ…ん？」

涙目になりながらそろそろと窓をみると、窓から少し離れた所に魔法の絨毯に座る男の人がいた。

どうやら、さっきは窓に近づきすぎて首しか見えなかったらしい。

「あと、成仏してほしいときは物を投げないからね？」

確かに。恐すぎてパニックになってたようだ。

「ごめんなさい。ビックリして…。」

見知らぬ人に物を投げつけてしまったので謝る。

「じゃあ、ちょっと手を出してくれる？そっちに入りたいんだよね。」

「？」

よくわからないが、椅子によじ登り窓から手を出す。その人は私の手を取ると、軽やかに絨毯から飛び降り窓の縁に立った。

「ありがとう。」

笑みを浮かべる見知らぬお兄さん。

髪は短めの暗めの金髪で、青い瞳の穏やかで優しそうな美形さんだ。

お兄さんは私が投げつけた物をテーブルに置いて、そこを飛び越え

て椅子に立つ私と向かい合わせになる。

「ちょっとビックリさせちゃったね。」

そういうながら、私の目元を指で優しく拭ってくれる。

そして目元に余計なキスまで。

「なっ!!」

ズサササと高速で後ろに退く。

「あーっとそっちは窓だから落ちちゃうよ。」

お兄さんががちり掴んでくれたお陰で、落下はしなかった。しかしお兄さんはいつの間にか私がいたはず椅子に座り、私は膝抱っこされていた。

とーっても嫌な予感がするんですけど。

「あなた何者?! いきなりあれはないっ! しかも何で名前知ってるの?」

こうなれば、不信任は一気に込み上げてくる。

見知らぬ人が窓から入ってきてさ、私の名前を知ってて、キスまで

してくるんだもん。

ジタバタとお兄さんの膝の上でもがくが、腰をがちり掴まれてて全然外れない。

「あっ！やっと聞いてくれた？私はリュカの知り合いで、ルイって言うんだ。」

「えっリュカの知り合い？」

それを聞いて少し安心する。だとすれば、初対面でキスするあり得ない行為に納得だ。

「うん。今日は、噂のリツカちゃんを見に来たんだよ。」

にこにこしながら、頭を撫で撫でしてくれるルイさん。

最近知ったんだけど、私はどうも頭を撫でられたり髪を触られたりすることに弱い。特にリュカのテクニシャンな手によって施されるシャンプーとか。

でも噂って、何だろう。なんか嫌だな。

「リュカ変なこと言ってませんでした？」

「変なこと？そーだな。何だと思う？」

この人…。

リュカの知り合いのせいか、おんなじ匂いがする。意地悪な質問して、笑みを深めるなんて変態だ。私のこと試してるもん。

「むー！やっぱいいです。噂なんて知らなくていいです。」

私はそっぽを向いた。

「ふふ。噂通り頭良くて、かぁーわいいね。」

ん？そういう噂ですか。

可愛いと言われて、女の子は悪い気はしない。

勿論、少数民族で小さな子どもで珍獣の赤ちゃんみたいな扱いで言われてるのはわかってる。

ちなみに頭が良いともよく言われる。でも、これは言われても正直複雑だ。中身は19歳だし。

それにしても、小さい子って無条件に可愛いんだな。この体になつてから今日もだけど、日々実感している。

「しかし本当可愛いなあ。リュカのお気に入りだけある。ねえリツカちゃん？」

キラキラした目で見ないで欲しい。イケメンさんにそんな目で見ら

れたら、眩しすぎる。

「なっなんでしょか。ルイさん。」

「ルイって呼んで。リュカも呼び捨てでしょ？」

「でも…。」

なんかこの人ね、シンプルだけどすごい上質な素材のギリシャ風の服、細かい細工の入った飾り帯、キラリと光る一粒石の…たぶんサファイアのピアスしてるの。

絶対身分高そうだし、呼び捨てはできない。

「ふーん。呼んでくれなきゃ、リツカちゃんに酷いことしちゃおっかなあ〜♪」

「ひっ！」

含んだ笑いを浮かべながら、しかも語尾に♪つけて恐いこと言わないで欲しい！

笑いながら脅されるって、本当恐い！

「よっ呼びますー！るっルイルイルイ！」

私は首をブンブンと縦に振る。ついでにというか、敬語なしとも約束された。

「リツカちゃんは、いい子だね。」

「ははは。」

乾いた笑いしか出てきません。ルイの笑いに無理矢理ねじ伏せられて、いい子にさせられました。

「私の恋人にならないかい？」

は？

「ロリコン？」

思わず口に出してしまった。

けど、こんな幼児に…えっと20代？のお兄さんがこんなこと言ったら誰だってそう思うよ。

第21話 まんまと拐われる

「ははは。そうくるかあ。ロリコンじゃないんだけど、リツカちゃんを一目見て気に入っちゃったんだ。」

爽やかに笑い飛ばす、ルイ。ただ飛ばしすぎて、最後の言葉もかきうくなってし。

「それに、君を前にすれば誰でもロリコンになるんじゃないかな。まいったね。女の子にこんな気持ちになるなんて、初めてなんだよね。どうしたものやら。」

「...。」

困りましたねと言う風に顔を覗き込まれたけど、私の方が困るよ。

何で、綺麗な顔をさらに輝かせながら私を見つめるの？ 恥ずかしいよ。

それかなんかついてるの？ お昼食べた後、歯磨きしたし。それとも珍獣が珍しいのか？

さっきから何言いたいのかもいまいちわからないし。小さくなって脳ミソ縮んだかな？

でもさ、女の子にこんな気持ち始めて…？

「ゲイなの？」

「そうくるかあ。はあ。それに落ちない。」

ふうっと息を吐きながら、頭を抱えてしまった。

「落ちないのは、ルイがしっかり掴んでるからだけど？」

「今度はそっちにいくか。なんだか心配になってきた。この年でゲイとかロリコンとかどこで覚えたんですか？はっ！？まさかトリュカに既にやられたとか…」

「んなっ…。」

あつぶない！

んなわけあるかーっ！って叫ぶところだった。ルイったら、なんてこと聞いてくれるんだ。まったくもう。

後半のやられたの意味がわかる子どもはさすがにありえないよね。

皆を混乱させないために、頭よさげな6歳を通してるし。

しっかり子ども演じないと。

とぼけなきやつ。

「やられたって何ー？ロリコンとゲイは、私ぐらいの子なら知ってるよー。」

わからないから、教えて？とねだるようにルイにせがんだ。

「うっ！いや、何でもありません。それなら忘れてください。いや今の子はすごいんですね。いいのか悪いのかわかりませんが…。」

ルイが、慌ててる。やられた発言を説明できないから、頑張って誤魔化そうとしてるしっ！

ぷぷぷ。

私は、心のなかでほくそ笑んだ。

ちょっといいきみ。さっき笑顔で脅されて恐かったもんね。仕返し、仕返し♪

「あっそうだ。さっき外に出たいと言ってたよね？私の絨毯で遠乗りしませんか？」

「行く行くっ！！」

わーい！嬉しい♪超暇だったもんね。

あれ？でも外に出ちゃ行けないって言われてるしなあ。

うーんと悩んでいるとルイがどうかした？と聞いてきた。

「あのね、リュカに危ないから勝手に外出ちゃダメですよって言われてるの。」

一応リュカはご主人様兼保護者様だからね。約束は守らないと。でも残念だな。

しょんぼりと俯いてしまう。

「大丈夫ですよ。」

よしよしと頭を撫でてくれるルイ。

「リュカからは、暇だろうリツカちゃんを遊ばせてくれてって言われてるから。」

「本当に!？」

「うん。それに、グランマールのケーキを持ってきてるんだ。絨毯の上で食べよ?」

グランマールとは、この前の王都観光で行ったお菓子屋さん。屋敷でもたまにおやつに出されるし、私の大大好きなお菓子屋。どれを食べても絶品なの。

「ルイ〜! ありがとう!! 大好きっ!」

思わず、ぎゅっとルイに抱きついた。でも初対面の人にこれは失礼だった。

「あの、いきなり抱きついてごめんなさい。」

そろそろと離れるが、ルイにそれを止められる。

「いいんですよ。恋人同士では普通でしょ？」

「!!」

おう、忘れてた。でも、その話まだ残ってるの？すっかりスルーしてたな。

にこにこ笑ってるけど、やや軽さのある笑い。爽やかさと軽さって紙一重なのかも。何を考えてるかわからないな。

「そんな可愛い顔で見つめられるなんて、気持ちを疑われてても幸せだな。」

「ふあっ！」

軽々と抱きかかえられて、かなりの至近距離で見つめ合う形になる。

綺麗な顔が間近にあって、勝手にドキドキしてしまう。

「まだ小さいしね。気長に待つよ。まずは、友達からだね。それならいいでしょ？」

ルイの誘うような優しくして甘い声に引きずられて、コクンと首が勝手に動く。

「あと、その目であまりじいっと見つめちゃ駄目だよ。誘うようなものだからね。探るように人を見る君の目は、獣の好物なんだから。今日は私で良かったね。」

ドキン。

ちよんちよんと頬をつつかれただけで、そこから熱が広がる。ルイの青い目が、色濃くなって熱を帯びてるような気がしなくない。ふっと笑い、目を細めた姿から、何だか危険を感じるのはなぜだろう。

「えっと獣？わかった！動物を見たらすぐ逃げるね。」

ドキドキしちゃったからよくわからなくなっちゃったけど、危険な動物にあつたらすぐ逃げろってことだね！

「うーん。やっぱりわからないか。はあ、じゃあ出掛けますか。」

「ん？」

なんでもないですよと言いながらも、苦笑するルイに抱かれて窓から絨毯へと乗り込んだ。

「んゝ美味しい。」

絨毯は、揺れることもなく快適。優雅に空を飛びながら、ケーキを頬張る…なんて贅沢なんでしょう。言葉まで優雅になるよっ♪

この世界は食べ物も地球に似てるし、本当に良かったなあ。食は幸せの源だし。

「あっそういえば否定し忘れちゃったけど…。」

「なあに？」

突然何かを思い出したようなルイ。

「私はゲイじゃないですよ。」

「じゃあ、普通に女好きなんだね。」

食べることに集中していたので、ルイの話もあまり聞いていなかった。

そして変な返答をしてしまい、慌てて訂正しようとしたが、その前にルイが答えてしまった。

「リュカほどではありませんが、女の子は大好きですよ。特定もいませんし、リツカちゃんが私の物になるなら全て切りますよ。」

ルイの発言に、ポロツとフォークを落としてしまった。

子ども相手にものすごいこと言ったよね？わかってるのかな？

なんだかクラクラする。

薄々思ってたけど、リュカはそうなんだね。うん。リュカやルイミ
たいなイケメンは周りがほおって置かないし、女の子なんか選り取
り見取りだもんね。

たまに夜起きると、リュカいないもんね。そうか、いちゃいちゃデ
ートしてるんだな。うん、そうに違いない。

そのことは、仕方がない。私には、止める権利もないしどうすること
も出来ない。

でも、何だか嫌だ。

頭がぼおとしてきた。気を抜くと眠っちゃいそう。

このもやもやした気持ちを放っておきたくないのに。

それが何かを知らないまま、眠りたくない。

子どもって、何ですぐ眠たくなっちゃうんだろう。

私はそのまま意識を手放した。

「寝ちゃいましたね。薬もよく効いているようだ。本当に隙だらけですね。簡単に人を信じちゃいけないよ？」

意識を失った私を抱き、頬に自分のものを刷り寄せてクスリと笑うルイを私は知らない。

「とりあえず今からリツカは私の物。あいつはどうするかな？まあ元はあいつが悪いんだからな。」

「リツカはどこに？」

「リュカ様お帰りなさいませ。たぶん、書庫かと。」

帰宅すると、すぐにリツカの姿を確認し愛でるのが私の習慣だ。

「そうか。ありがとう。」

使用人に礼をいうと、逸る気持ちを押さえながら書庫に向かう。

我ながら、子ども相手に重症だと思う。

リツカが、愛しくてたまらない。少しでも離れてしまうと会いたくて堪らない。

一刻も早く抱き締めて、あのくるくると変わる表情、可愛いく素直なリツカに癒されたい。

書庫を開けると、強い風が吹き抜ける。窓が開いている。

そして、リツカの姿はない。

窓に近づき、側の机を見ると、本やノートに日記帳、可愛らしい絵などがあった。

リツカはここで勉強していたようだ。

「これは!!」

だがあることに気づいた私は、開いたままの窓に近づく。

「結界が破られてる。」

屋敷には島全体と屋敷に2重の結界を引いてある。

不審者を入れないように、島の船着き場から屋敷の正面入り口からしか人が通れないようにしてあるのだ。

今回はその2つとも、破られている。かなり強い魔力の持ち主だ。

そして、この結界を破った力には覚えがある。

「まさか…?」

「誰か!! 誰かいないかっ!! ドノヴァンを急ぎ連れてくるのだ。」

私は、怒りと焦りを押さえながらドノヴァンを呼びつけた。

空へと続くその力の持ち主の力の痕跡を、ドノヴァンに乗って辿るしかない。

そして、感じる。

リツカは、その痕跡の先にいる。そう遠くない場所だ。

しかし、リツカに所有の印をつけていて良かった。
このような形で使うなんて、思いもよらなかったが。

待っていてくれ。リツカ。

必ずこの腕に君を取り戻す。

第22話 恐がる

「ん〜。」

頭を誰かに撫でられてる。

くすぐったいような気もするけど、気持ちいい。

だから、髪を触られたり頭を撫でられるのって好き。

「まあるくなったり、伸びたり。まるで猫みたいですね。」

リュカ？

ううん、違う。声も手の感じも似てるけど違うの。なんとなくこの人の方が、手も細くて声も高めな気がするから。

リュカは、甘くて低い声に、顔に似合わず少しゴツゴツした手をしてるから。

じゃあ、誰？

微睡みから目覚めると、ルイが私を覗きこんでいた。

「ごめん。起こしたね…。」

謝ってるのに、謝ってない。だって嬉しそうにしてるんだもん。でも気持ちよく寝れたから、気にならない。今もこうして、髪をすいてくれるし。

ぼんやりとしながらも、むくりと起きる。ソファーに座るルイの膝の上にいた。

「あふっ。」

私はそこに器用に丸まって寝ていたようだ。

しかしそんなところに寝てたことに気がつかずに、ルイの膝から降りる。そしてそのまま丸まった体を解すように、伸びをしたついでにあくびをする。

「可愛い。やっぱり猫みたいだ。」

「むっ。猫じゃないよっ。」

まだ働かない頭と唇でなんとなく反論するけど、ルイはクスクスと笑うばかり。

「ここにリュカが来ると言うから、それまでお茶しながら待っていいようか？」

ソファーから腰を上げて歩き出すルイを、ぼおと見つめていた。

「う、ん。んんん!？」

キラキラした空間が目に入り、一気に覚醒した。

この部屋めっちゃめっちゃすごい。豪華絢爛、きらびやか過ぎる!!

リュカのお屋敷もすごい豪華だけど、リュカがコレクションした美術品や調度品を生かすようなどちらかと言うとシンプルな感じた。

ここは壁から何やらまで、びっしりと装飾画や、来るものを飽きさせないような細かいかつ豪華な細工があちこちに施されてる。あの金ぴかでキラキラなのは金？金だよね？

「ああ。ここは、私の屋敷のサロンだよ。絨毯に乗ってるうちにリツカちゃん眠っちゃたから、ここで休んでもらってたんだ。」

目を白黒させてる私の反応を見て、察してくれたようだ。

サロンって客間だ。こんな豪華なサロンがある屋敷に住んでるなんて、本当にルイってばお金持ちさんだ。いやそれよりも、謝らなくちゃ。

「あの、寝ちゃってごめんなさい。」

背を向けて歩くルイに、謝る。

うーん、またやっちゃった。

私ってば、すぐ寝ちゃうんだよね。そして誰かに…大抵はリュカの手で知らぬ間にベットに運んでもらうはめになる。自分のことはちゃんとしたいのに。

それを初対面の人にやらせてしまった。

これは、体が子どものせいじゃないかって考えてる。例えば子どもって大人より元気でだけど、疲れを知らないというか…疲れがわか

らないからはしゃぎすぎて寝ちゃう感じじゃないのかなって。

でも今回はあまり動いてないし疲れてないはずだけどなあ。ケーキ食べてて…。

「いいんですよ。可愛い寝顔が見れましたし。」

「ええ!？」

不敵に笑うルイに、身の危険を感じてぞわつとした。

寝てる間に何にもされてないよね? いや、何を想像してる私!?

大人が子どもに何かするわけじゃないじゃん…? でも告白されたよ。いや大人が子どもに冗談で言ったただけだ。あ、れ、は。

そもそもだ。私はルイを変なことをするかしないかどうか人物として判断出来るほど知らない。

そう言えばルイってリュカの知り合いって言ってたけど、何者なんだ…?

「アイスココアでいいかな？」

「えっあっ! うんっ!」

あれこれ考えてたら、飲み物の準備をしてたらしいルイに声を掛けられてビックリしてしまった。

ヤバイ。給仕までさせてしまった。

ううん、それどころじゃない。この人怪しくない？

今までの彼の行動を考えると、最初から怪しすぎる！

怪しいって考えると、どんどんルイに対しての不信感が募っていく。

「はい、どうぞ。おや、何を考えているのかな？」

コトンとソファアの前のテーブルにグラスを置いてくれるけど、私は向かい合わせになった彼をじっと下から見つめていた。

不審者を見るように。

いろんな意味で彼から目を離しちゃいけないと思った。

バンッ！！

突然扉が開いた。

「リツカ！！」

「リュカッ！」

いつもスマートなリュカには、珍しく慌てている様子だった。

「さっ早くこっちに来るんです。」

そんなこと言われても、いきなり体は動かない。

動こうとしない私を見て、ずかずかと足早に部屋に入りこっちに來るリュカ。

「残念。また2人きりで今度遊ぼうか。」

私を見下ろしながら、笑いかけるルイ。

「きゃっ！」

ルイの手が私に向かって伸び、そのままお姫様抱っこをされる形になる。

「かなり早かったですね。リュカ。もうちょっと遅くてもよかったのに。」

私を抱っこしたまま、背を向けていたリュカの方へと振り向くルイ。

「大事なものを奪われたから当然です。早く返してもらいましょうか。」

「はっ離してよー！！リュカのところに行くんだから！」

「リック！」

どんなに暴れても大人の力には敵わないから、逃げ出すことはでき

ない。

「だーめ。もう少しだけでいいから、いい子にしてて。」

「リュカつごめんね。今ルイが不審者って気づいたの。」

私が馬鹿だった。どうして、こんな人についてきちゃったんだろう。

「話は後で聞きますから。」

リュカは冷たい目に表情をしていた。かなり怒ってる？…よね。知らない人にはついていくなって、何度も何度も言われてたんだから。ゆらりと空気が歪み、少し重くなって体にのし掛かる。

「空気が…何これ。」

「へえ〜リツカちゃん見えるんだね。おい、リュカ。力が漏れてる。リツカちゃんと私を押し潰す気か？」

「冗談止めて下さいよ。ちゃんと、あなただけ潰しますよ。」

目は、互いに睨み付けたまま。

それなのに笑いながら会話をする2人は怖い。

一触即発。

ピリピリとした空気。

これから何が起こるの？

恐い…恐い…。

バン！！

その空気を打ち破る音がした。

第23話 驚かされる

「リュカッ！」

私の声ではない。扉から入ってきた美女さんの声だ。

艶やかな焦げ茶色のクルンとした長い髪をなびかせて、美女さんはリュカに思いつき抱きついた。

「いきなり、抱きつくのは止めて下さい。」

「だって久しぶりじゃない？会いたかったわ。リュカ…。」

リュカの首に手を回し、うつとりとした表情を浮かべている。

美女さんの登場で、重い空気は甘い空気変わった。

それにしても、美男美女だな。絵になる2人だ。

もしか、この人がリュカの不特定多数の恋人の1人！？

こんな美女に久しぶりとか言わせちゃって、どんだけ色んな女の人
のところを渡り歩いてるの！？

「うう、リュカ。」

うわー美女さん泣いちゃってる。

「泣かないで。ね？」

甘い声で慰めながら、困ったと言う表情でその涙を拭うリュカ。

泣かないでってリュカのせいでしょ！？

そんな甘い恋人同士の様子を見て、私は怒っていた。

きつとリュカは、こんな風に沢山の女の人を泣かせてるに違いない。なんてひどいやつなんだ、リュカ。

さっきのもやもやは、きつとこのことが嫌だったからだな。きっちり言わなくっちゃ！！

「リュカー！！彼女さん泣かせちゃ駄目でしょ！！一途に…。」

はっ！

待って。この美女さん一筋になったら、他の女の人泣いちゃうし。

どっとうしよっ、どうしよう。うーん。

「ぶっ！もう駄目：リツカちゃん、面白過ぎる。ポカンとして大人しくなったと思ったら、怒りながらとんでもないこと言うし、今は困ってるし。」

「ちょっと！ルイ、笑い事じゃないんだからあ！」

グリグリと私の眉間のシワをほぐしながら、笑うルイ。

どうやら笑い上戸スイッチが入ったみたいで、止まらないし。

私は超真面目なんだけど。

「ああーおかしい。ねえ、私とあの人の顔を見比べてみてよ。」

「ええ？」

笑い過ぎて涙目になった目元を拭うルイを睨み付けたまま、美女さんとルイを交互に見る。

リュカは、さっきと打って変わって目を見開き訳がわからないと言う顔。

隣にいる美女さんは、私が怒ってビクリしたせいで涙が止まっらしい様子。

美女さんは、ルイよりも年上な感じ。長い髪は真ん中で分けられていて大人っぽいのが、よく見ると可愛らしい顔立ちだ。やや丸顔のせいだろうか。

しかしながら、とっても整った顔である。その綺麗なパーツが詰め込まれてる小さ過ぎる顔、顔として機能してるか疑問だ。

しかも細い。きらびやかでふんわりとした裾の長いワンピースのスリットからチラチラ見えるふくらはぎと足首、女としての華奢な感じを

強調してる。

綺麗で可愛いくて華奢なその感じは、男でなくとも守ってあげたくなる。

「ふふ。そんなに見つめられたら恥ずかしいわ。」

薄茶色の瞳が弧を描き、穏やかな笑みを浮かべる。

その笑顔、さっき見た！

くるっと振り向きルイの顔と比べる。

「わかったでしょ？」

その笑顔でわかったよ。

「ルイのお姉さん！」

「「えっ!？」」

「やーん! いい子。」

リュカとルイの拍子抜けした声に、重なる美女さんの高い声。

しかしリュカとルイの声は、美女さんの声に掻き消されたので私には聞こえなかった。

えっと…。

じゃあさっきのピリピリ雰囲気は、シスコンなルイVS駄目彼氏なリュカの対決だったの!?

私ってば、なんでか知らないけどリュカの恋愛沙汰に巻き込まれて連れてこられたってこと?

リュカの馬鹿。なんてことしてくれたのよっ。

ぶつぶつ言いながらぶんすかと怒っていると、ルイからとんでもないことを言われた。

「さすがにシスコンは勘弁してもらいたいな。あれ、母なんだ。」

「は？」

母?

若っ!若すぎるよっ!どうみても30代前半ぐらいで、ルイよりも少し上ぐらいにしか見えない。色白の肌はツルンツルンで、シミ1

つないし。

「んでもって、私はリュカの兄。」

「初めまして、リツカちゃん。私はルイとリュカの母で、この国の王妃をしてるロメーヌよ。」

驚く暇もなく、次々と投げられる衝撃の事実と言う名の爆弾。

そのせいで脳内は、ぐっちゃんぐちゃん。頭の中が灰になって真っ白になってしまった。

「リツカちゃん、おーい。ぷしゅーってなっちゃったよ。王族だつてこと言っただけだったんだな。リュカ。」

ええそうですとも。リュカは言ってますでしたよー！

「必要ないと思ったので。それより、リツカを出汁に使って私を呼び出したのは母上ですか？」

えっ？

必要ないってどう言うこと？

それよりもって簡単に流しているの？

リュカの顔を見るといつもと変わらない。

その変わらない顔に、妙な違和感を感じた。

何だろ。

しかしその違和感と疑問は、次々と交わされる会話によってすぐに忘れてしまった。

「だってリュカったら週1回は会う約束なのに、2週間も来ないじゃない？」

えー！2週間会えなかっただけで？リュカはたぶん立派な今年24歳成人男子だよ？

ちなみにたぶんなところは、リュカの大人としての発言、行動や態度に日々疑問を抱いてるから。

ふとさっきから今までのロメーヌ様の言動を思い出してみる。

リュカへの溺愛っぷり…すごすぎる。

「んで私が母上に泣きつかれてね。調べたらこんな可愛い子がいるじゃないか。それを報告したら、この子も見たいと母上にせがまれてね。だったらリツカちゃんを連れてきたら、自動的にリュカも釣れると思ったんだよね。まさに一石二鳥だろ？」

一石二鳥って…。はぁ溜め息が出てしまう。普通に会いたいって言えば言いのに。

どうやらこの2人、リュカとルイは母であるロメーヌ様に相当弱いらしい。

確かに。わかるよ。

こおーんな可愛くて美人な人をお願いされたら、断れないし。もう涙なんか見せられたら、イチコロ&ハートがズッキュンだもん。

「さっきは恐がらせてごめんね。リュカがもうちょつと遅く来たら、母上もいたからあんな風にはならなかったんだけどね。」

「ルイ。貴方がした所業を棚の上に上げないで下さい。早くリツカを返して下さい。」

リュカったら、未だに怒りが収まらないみたい。

私とは言えば、怒りはない。さっきからビクリしすぎて、何が何だか。現実を受け止めるので、精一杯。

「私はリュカが怒るから止めなさいと言ったのに…。ロメーヌがリツカちゃんを早く見たいと無理を言っただけで聞かなくてね。」

おっ！この人も、ロメーヌ様に弱いのか。

って…。

この室内に響いた、包み込むような落ち着いた低音ボイスは一体誰のもの！？

スゴイいい声！かなり好み！！

「陛下。」

「早かったのね。」

「お早にお越しで。」

ルイ、ロメーヌ様、ルイの声の先は、扉の人物へと向けられた。

陛下Ⅱ王様

つまり、リュカたちのお父さん！？

ひえー今日は絶対心臓が縮まった。

あとどれだけ偉い人会えばいいの？この人がラスボスだね？

そんな失礼なことを脳内で考えつつも、私はラスボスな王様に釘付けだった。

ルイのような青い瞳を持つ50代くらいの男性。背もリュカやルイのように長身だ。

リュカのような金色の髪は、長めの波打つ前髪が左に多めに分けられていて後は短めだ。

この年にしては、派手な感じもするが似合ってしまったのがすごい。

それにただ扉の枠に背を預けてるだけなのに、かっこよすぎる。どっからでてるんだろう…その粹な感じ、洗練された雰囲気。

年齢を重ねてできた円熟された人柄と王であるからだろうか。

うちの良く言えばほのぼのなヨレヨレ父とは、えらい違いである。

「君がりっかちゃんだね？ビックリさせたかな？」

ぽけ〜としていると、笑いながら声を掛けられてしまった。

このボケた顔を笑われたに違いない。

でも今は、さらに情けない顔になってしまっている。

目尻のシワが濃くなって、さっきと違って優しく爽やか渋い王様の笑顔にクラッとしたから。

おいしすぎるよ…そのギャップ！

「今回はすまないことをしたね。一応ロメーヌには、無理矢理連れて来るのは止めなさいと止めたんだがねえ。」

「いえっ。その…ダイジョーブです。」

何がどうダイジョーブなのかは聞かないで欲しい。

だってこの国で一番偉い王様に謝罪させられるって言う事態になってるんだよ？ こう言うしかない。

「さっ、ルイ。リツカちゃんを離しておあげなさい。」

「んゝ。もうちょっと抱いてたいんだけどなあ。」

何を渋ってるのさ、ルイ。

王様の命令だし、私もお姫様抱っこは恥ずかしいからいい加減降ろして欲しい。

「ルイ、私に早くリツカちゃんを寄越しなさい。こんな可愛い子を長い間独り占めにするなんて、抜け駆けだ。」

えっと…王様？

何を言ってるの？ 今回の事件の首謀者のロメーヌ様を止めたってさっき言ったよね？

あなたも今回のことに一枚どころか、ガッツリ噛んでたんですか？

第23話 驚かされる（後書き）

事件のまとめと、人物のまとめを次話でリツカにしてもらいたいと思います。

顔小さい人見ると、顔として機能しているのか！？って思っちゃいます。ガン見です。羨ましいです。

第24話 親子だなと思う

どうやら、私は現在王宮のサロンと言うダンジョンに連れ去られた模様です。

首謀者は、この国の王妃様でありルイとリュカの母のロメーヌ様。

共犯が、リュカの兄で王子様のルイとリュカの父である王様のラザール様。

ラスボスはラザール様であったが、レナルドと言うルイとリュカの弟王子と言う隠れキヤラの人がいるんだって。

これが、ペルノヴァのロイヤル・ファミリィ。

なんて、分かりやすい。さっき自己紹介された時に思ってしまった。偶然に違いないけど。

ラザールⅡ父

リュカⅡ次男

ルイⅡ長男

レナルドⅡ三男

ロメーヌⅡ母

う行でまとめられちゃうんだから。

残念なのは、兄弟が順番に並んでないところかな。

話は戻るけど、私を連れ去った犯行動機がとんでもないのだ。

突然異世界に表れた私に付きっきりのリュカが、ロメーヌ様と週1で会うこと約束を2、3回破ったこと。

リュカに会えないことを悲しんだロメーヌ様が、ルイに調べさせてその原因が私と知り、会いたくなつてルイに命じて私を無理矢理ここに連れてきたと言う訳だ。

普通に会いたいと言えばいい話だが、そうもいかないことが頭上で繰り広げられ会話で判明した。

はっきり言って今も流れる音声は、頭上注意な会話である。

「リックは私の大切で大事なコレクションです。こちらに来たばかりのリックを、いきなり父上や母上とルイの好奇の目に晒したら、ビックリするでしょう。リックの心が傷みます。」

「ほらね。簡単にリックちゃんを連れ出せないと思ったから、一服盛って寝かせてから連れてきたんだよ。」

何をどうしたら、私の心が傷むんでしょう？

うわあ。

リュカったら笑いながら、ルイに怒ってるよ。恐すぎる。

てかさすが兄弟。さっきは笑いながらルイに脅されて恐かったもんね。

と言うか、一服盛ったって!?! もしやあのケーキ? だから、寝ちゃったの!?!

「リツカは門外不出の国宝級なんですよ。取り扱いに気を配るのは、当然のこと。もう少し待てなかったんですかね。それに私の大事なリツカに一服盛ったと言うのは、聞き捨てなりませんね。」

私が国宝級? リュカったら間違ってるよ。珍獣は天然記念物だから。

「過保護過ぎだろう。リュカ。」

ルイの言う通り。

どんだけ、過保護なんだろう。

どうやらこの私に対して過保護すぎるリュカのこの態度が原因で拉致されたみたいです。

「何とでも言えればいい。それより、まさかリツカが寝ている間に傷物になんかしてないでしょうね?」

傷? 傷なんてないなあ。痛いところなんてないよ。

「リュカ平気だよ。私怪我なんてしてないよ?」

「さあて、どうかな。」

何なの、ルイのその黒ーい爽やかスマイル。えっ！？私一服盛られた以外になんかされたの？

「リーツカ。自分じゃわからないでしょ？後で調べてあげますからね？」

「ひゃうっ！」

リュカまで何その黒ーい笑い方止めてー！ついでに黙ってろって声まで聞こえたよ？怖いすぎる！！

「ルイもリュカも止めなさい。リツカちゃんがさつきから、恐がっているよ。皆仲良くしないとなあ？」

ラザール様の言うことに、コクコクと頷いた。助けてくれて、ありがとう。

「でも、リュカの方がひどいわ！私たちが日本人形が好きなのを知ってるのに、独り占めにしてるなんて。」

「そうだぞ。リュカ。こんな瓜二つな可愛い子を紹介してくれないなんてなあ。」

ロメーヌ様が言うことに、賛同する王様。

「こんな素晴らしい子いませんからね。独占なんて当然じゃないですか？」

しれっとすごいことを言っただけのリユカ。

「やっぱり、リツカちゃん拉致って正解だったな。さっ父上。私にリツカちゃんを寄越してください。」

正解ではないと思わずツツコミたくなるルイ。

でも、ツツコミを入れられる状況じゃない。ひたすら大人しく、お行儀よくしなきゃいけない状況なのだ。

「駄目だ。ルイが独占した分、私がリツカちゃんというんだ。なあ、おじさんという方がいいよな？」

私をよしと撫でてくれている、王様。

現在テーブルを挟んで向こう側のソファーにルイとリユカ。

そして、こちら側にラザール様とロメーヌ様。

私の席はない。ソファーが狭いわけではない。むしろ王宮デラックス使用で、広すぎるくらい。

私の席は、恐れ多いことに天下のお膝元。リアルにだ。

この国で一番偉い人、王様に膝抱っこをされている私。

恥ずかしい、気まずい、申し訳ない気持ちで一杯だ。

そしてギラギラと私を狙っているようなルイ、リュカの目が注がれていて、背中には自然と冷や汗が流れる。

「いっえ。あのっおじさんなんて思っていないです、へ、陛下。」

かなり緊張しているので、しどろもどろになりながら答える。

「ラザールでしょ？リツカちゃん。」

私の顔をわざわざ覗き込んで、ニコリと笑いかけてくる。

「うぐっ！はい、ラザール様。」

陛下とか殿下と呼ぶべきところだが、自己紹介で様々な攻防戦を繰り返して名前に様付きで落ち着いた。ロメーヌ様も同じくだ。ルイは最初が最初なんでそのままだ。

それにしても、心臓に悪いぐらいカッコいい笑顔。鼻血出そう。

さすが、ルイとリュカの父だ。

「赤くなっちゃったな。いやぁ可愛いなあ。実に素晴らしい。」

「す、素晴らしいのは、ラザール様です。」

むぎゅうと堅い体に抱き締められた。40代後半かな？…私は、その年齢らしからぬ贅肉のない体に感心してしまった。

「はあゝ。」

正直、緊張しすぎて疲れた。明日は絶対肩が筋肉痛だな。

頭上ではラザール様とルイとリュカで、日本人形の素晴らしさを交えながら私に関するとてもない話が繰り広げられている。

膝抱っこがどーのとか、黒髪黒目がどーのとか、早く返せだのとかもう…色々てんこ盛り。

どうやらこのロイヤル・ファミリーは、日本人形が大好きらしい。

これも犯行動機…私を無理矢理連れ出した理由の1つみたい。

でも、こういうんな人に日本人形に似てると言われたらちよつとシヨックだ。

可愛がられてるのは、ありがたいんだけどね。

日本人形って言われると、市松人形とか髪が勝手に伸びちゃうホラーなイメージが浮かんじゃう。

あれと瓜二つって言われたら、誰だってへこむよ。

私そんなに、日本人形と似てるのかなあ。ここに来て初めて言われたよ。日本じゃ言われたことないんだけどな。

外人さん：じゃなくて異世界人さんの美的感覚ってよくわからない。今までリュカの鑑定の仕事を見てきて、可愛い、美しいとか同じ感覚なんだなあって思ったんだけどな。違う部分もあるみたい。

ぽけえともう他人事のように3人の様子を眺めてみる。

性格も似てるし、趣味も同じだし、リュカの家族なんだってしみじみ思ってしまう。

ラザール様にルイもリュカも似てるなあ。勿論ロメーヌ様にも。

それに家族は、皆美形。

美形遺伝子ってこうやって受け継がれていくんだなあ。

「もう、我慢できないわ。」

今まで沈黙を保っていたロメーヌ様の言葉と同時に、柔らかい体に抱き締められた。

「「!?!」」

ビックリとしている3人とは対照的に、私はうっとりとしていた。

久々の女の人の柔らかい体といい香りに包まれるこの感じ…。

私は変態じゃないよ？

最近男の人のカチカチ筋肉武装体に抱き締められてばかりだったからだったし、私も持ってたはずの胸の感触を懐かしく思っただけ。

「もう貴方達たらっ。私達レディをほっというて会話をするなんて失礼よ。」

「いや、そう言うわけじゃないんだよ？ロメーヌ。」

ご機嫌斜めなロメーヌ様に、ラザール様もたじたじのようだ。親子揃って弱いんだな。

「そうですよ。母上、一緒に仲良くお茶をしましょう。ね、だから座って？」

ルイはなんとか機嫌を直そうと、ソファーに掛けるようロメーヌ様を促す。

「いいえ。リツカちゃんは、私の部屋に連れていきます。誰もリツ

カちゃんのお相手をしないのなら、私が独り占めにします。」

「しかし、母上…。」

「リュカ。」

困惑するリュカに、どうしたらいいかわからない私は不安になってしまう。

「リックちゃん。私と女同士で色々話しましょう。ねえ？その方が絶対楽しいわ。」

「うっはっはい。」

王妃様という前に、こんな綺麗な人にニッコリと可愛らしい笑みを浮かべられたら逆らえない。

あれ、これさっきの…。

ルイとリュカの笑顔で相手を黙らせちゃう感じにそっくり。やっぱり親子だ。

「あっリュカっ!!」

「リック！」

そんなことを考えてるうちに、私は部屋の外へと連れ出されてしまった。

ボタンと扉が閉じる前に、リュカの声が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5034s/>

君は私のコレクション!?

2011年9月14日18時22分発行